
スノーチャイルド

杏羽らんす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スノーチャイルド

【Nコード】

N9979W

【作者名】

杏羽らんす

【あらすじ】

夏だというのに町では異常気象といって差し支えないほど寒い日が続いていた。ある日、学校の帰り道で主人公は白い和服を着た女性と出会う。しかし彼女はなぜか衰弱しており、心配になった主人公はいったん彼女をアパートへと連れ帰ることにする。回復したその女性は、自らを雪女だと称し、さらには主人公のアパートに居座ると言い出して――

序幕

夏だというのにここ数週間は寒い日が続いていた。

ただし、これは冷夏ともまた違う。

冬が去り、やがて春が訪れ、それが去ったと思えばまた冬に逆行しつつあるような寒さ、というのが適切だ。

それでも人というのは環境の変容に対して柔軟に対応できるものである。寒いとはいえ真冬の凍てつくような寒さほどではないため、適当な上着を一枚羽織れば凍えるまでには至らない。

夕焼けと群青の混ざった中途半端な、ある意味では幻想的とさえ言える色合いの空から寒風が流れ行く――。

寒空の下、アスファルトの街路を二人の学生が歩いていた。高校での授業を終え帰宅途中の二人は、ときおり吹く寒風にスカートをなびかせながら歩を進める。

「風が冷たいわね、今日も」

一人は、風でなびくスカートを鞆で軽く押さえながら歩く小柄な少女――神谷魅魚^{かみや みお}である。童顔ながらも凜として落ち着いた表情は、むしろ大人びた印象を漂わせる。

そしてもう一人は、

「あ、あう……」スカートが風に揺れることを過剰なまでに意識してしまつて、顔を真っ赤にしながら裾を押さえることに必死な早乙女^{さお乙}凜。

（もう、魅魚がこんな提案しなければ……）

心の中でそう呟く。凜は魅魚の持つとある趣味に対し、非常に迷惑していた。

「あら」

背筋を伸ばし堂々と歩く小柄な少女——魅魚が冷静な、それでいて悪戯を楽しむような口調で言った。微声ながらも力強い、涼やかな声音で、

「もつと顔をあげて歩きなさい。せつかくのかわいい顔がもつたないわ」

同時に寒風が吹いた。肩にかかる辺りで揃えられた、漆を塗ったように艶やかな魅魚の黒髪がわずかに揺れる。

きれいに切り揃えた髪。整った顔立ち。小柄で華奢だが姿勢の良い体躯。魅魚はまるで精巧をきわめた日本人形のようにでさえあった。そんなこと言われても、恥ずかしいものは恥ずかしいんだよ……」
対し、凜は力無く返答する。

「まったく……」

もじもじして俯いたままの同級生の姿を情けなく思ったのか、魅魚は呆れた顔で、

「凜」

名を呼び、ぴたりと足を止めた。

そして凜の方へ振り向くと、おもむろに凜のはいているスカートの裾を掴み、ぐいぐいと引っ張ってみせた。

「わっ、や、やめてよっ！」

膝上を開放されかけ、素足の肌色がちらりと覗く。凜はスカートを慌てて抑え込んだが、その顔は羞恥心からか真っ赤に染まっている。

「うふふ。ウブなのね。かわいいわよ」

魅魚は口端を僅かに上げて小悪魔じみた笑顔を浮かべた。その表情からは悪戯心とささやかな悪意が放出されている。そのうえ冷静沈着な雰囲気を漂わせているのだからさらに性質が悪い。付き合いはまだそれほど長くないが、魅魚に嗜虐的な趣向があるのは間違いないと凜は思う。

「もっ、困るよ。本当に……」

人を食ったような性格の魅魚の振る舞いに、凜はいつも参らされ

てばかりだ。身長は凜の方が高いため、物理的には凜が魅魚を見下ろす状態になるものの、しかし精神的には、魅魚が見下ろし、凜が見上げているような感覚である。

と、前方から歩いてきた若い男が、二人に声をかけた。

「ねーねーねー。キミたち、かわいいね。学校の帰り？　一緒に遊ばない？」

サングラスを外しながら軽薄な口調で言うと、男はニヤリと口端をあげた。派手な服とアクセサリで身を固めた、いかにも今時の若者といった風貌の男だった。歳は、高校二年生の凜たちより、二、三うえのように見える。大学生……だろうか。

男は二人を舐めるような視線で見ると、足先から頭頂まで、身体のパーツ毎に順にチエツクするように移動した視線は、魅魚を見終え、次に凜の気弱そうな顔を直視したところで停止した。

「あつ……あの……」男の発する威圧感に凜は委縮し、一步後退する。

これは言うまでもなくナンパである。にやつく表情を見る限り、やましいことを考えているとしか思えない。

「いや、あの……その……えっと……」

突然の慣れない出来事に混乱してしまい、凜は言葉に詰まってしまった。

そんな凜の様子を見兼ねて一步前へと出、冷静に切り返したのは魅魚であった。

「わたしたちにはあなたのような下衆と遊んでいるヒマはないの。悪いけれど別の、もっと尻の軽そうな女を当たってくれないかしら」

冷たく重みのある彼女の語調に、今度は男が後退した。そして、あからさまに不機嫌な顔になると、

「ちつ……！　ふ、ふん！　ちよつと顔がいくらいで……。いい気になってんじゃねーよ」

馬鹿にされてその気をなくしたのだろう。もしくは魅魚の気迫に気圧されたのかもしれない。男は吐き捨てるように言い残して、その場を去って行った。

「まったく。典型的な雑魚ね」

小さくなっていく男の後ろ姿に向かって悪態を吐き、

「でも、わかったでしょう」

再び振り向くと魅魚は凜の顔を見据える。

すっと腕を伸ばし、凜の鼻の先に向かってひとさし指を立てた。

「あなたは、かわいいのよ」

ふふ、と満足そうに微笑し、魅魚はその手を開くと凜の肩にぽんと置いた。

凜はその動作に「観念しろ」というメッセージを感じ取っていた。

「そ……そんな……」

「もつと顔をあげて胸を張り、その魅力を振りまいて歩きなさい。元々かわいい顔に、わたしが化粧をしてあげたのだから鬼に金棒じゃない。その制服だって、似合っているわよ」

「そ、そんなの無理だよ……」

追い討ちをかけるように言葉を続ける魅魚に、凜は弱々しい一言でなんとか抵抗を試みる。しかし魅魚はまったく引かない。

「どうするの、そんな弱気で。座右の銘は『何事からも逃げない』でしょう」

「そ、それと、これとは……話が別だよ……！　というか、おかしい……よ」

凜は伏せてばかりだった顔をなんとか上げ、じっと魅魚の顔を見つめた。

そして、吐露するように言う。

「僕……男なのに」

凜は非常に迷惑していた。

魅魚の持つ『女顔の凜を女装させる』という趣味に。

1 / 雪降りの夏

都会と田舎の中間のような、派手でもなければ地味でもないという中途半端な地域——霞町^{かすみちょう}。そこに建てられた県立校が、凧の通う霞西高校である。

ここ数週間、冬のような気象が続いているため忘れがちだが暦の上ではすでに七月に入っている。もうすぐ夏休みという時期のせい、生徒たちの顔も心なしか晴ればれとしていた。

霞西高校は二期制をとっているため定期試験は夏休み明けに行われる。そのためテストのことを気にしている生徒も少数で皆が思い思いに高校生活を満喫している。

現在、時刻は正午を過ぎ——昼休み。

凧の在籍する二年三組の教室では、他愛もない雑談を楽しむ者、机を囲んで昼食をとっている者、机に突っ伏して寝ている者という風に過ごし方は様々だ。

その中でなら凧たちは雑談を楽しむ者に分類される。クラスメイトの幸太郎^{こうたろう}と一緒に昼食をとり終えた凧は、その後によってきた魅魚を交えた三人で談笑をしていた。

「ほう？ 凧よ。おまえ、ナンパされたのか……。となれば、もちろん……ついていったんだよな」

さらりとした前髪を指で弾くと、幸太郎は不敵な笑みを浮かべた。凧、幸太郎、魅魚の三人は、高校入学からの——つまり一年と数カ月程度の付き合いではあるが仲は良く、普段から一緒にいることが多い。

「残念だけど、わたしが追い払ったわ。その領域は、まだ凧には早すぎるでしょ」

凧に代わって答えたのは魅魚だ。仲が良いといっても力関係まで

等しいというわけではなく、三人の中では魅魚の権力が最も強い。

「焦って先走っても、満足のいく結果は出せないわ」

そう言くと、手にした紙パック——中身は魅魚の持参したアボカドジュースだ——のストローを「はむ」とくわえる。ちゅーと飲み始めると、後は我関せずといった雰囲気醸し出した。

「ふーむ、そうか……。確かに、物事は順序が大切だな。一步一步、着実に段階を踏んでいけば、凜のような弱々しい男はたちまち道を踏み外し、転げ落ちてしまうだろう。なーに焦ることはない！ 人生は長いのだからな！」

ふはは！ と無駄に凜々しい笑い声をあげながら幸太郎は凜の背中を叩いた。

「ま、待ってよ。ぼ、僕は、男の人と……その、そういう趣味はないよ。うん、無い。まったく」

凜はたじろぎながらも慌てて反論する。

魅魚に女装させられているときは恥ずかしさのあまり弱々しさが目立つ凜だが、まともな服——今なら学生服——を着ている普段の状態であれば普通に会話できる。とはいえ気が弱いという根本的な部分ではさほど変わらないのだが。

「なるほど！」

合点した、と手を叩く幸太郎。

「つまり、女性とならしたい、と。喜んで御受けすると。さあボクをメチャクチャニシテ！ と。そういうわけだな。はっはっは！ なーに恥ずかしがらんでいい。お前もそういう年頃というだけだ」

「不潔なのね、凜ったら。幸太郎は汚物だけど」

幸太郎の揚げ足を取る言葉に、すかさず魅魚が加勢する。実際のところは幸太郎にまで攻撃が及んでいるのだが、本人は気にしていない様子である。

「そ、そういう意味じゃないよっ！ 誤解だ」

二対一。完全に劣勢に立たされてしまった。これではいつものように弄り倒されて休み時間が終わってしまう。

三人の力関係は魅魚を中心に、日によって二つのパターンにわかれる。すなわち、凜が弄られるか、幸太郎が弄られるかである。

今日は凜がその餌食になってしまったようだ……。

それでもなんとか反撃しようと、凜は幸太郎の顔を指さし口撃を試みる。

「ぼ、僕ばかり女好きみたいに言うけど、幸太郎の方こそ、女の人に興味があるから、そういうことを言うんじゃないのっ？」

何とも単純な発想だがそれゆえに的を射ていて効果的でもある。

これでどうだ、と凜は満足げな顔を浮かべた。さらにもうひと押し、言葉を付け加える。

「女好きなのは幸太郎だ！」

「そうだぞ」

平然、の二文字に尽きる。あつさりと肯定されてしまった。

「変態ね」魅魚がぼそつと呟いたが、幸太郎はそれにも動じなかった。

「ああ、オレは変態だ。趣味が女体研究なのだからな。だが、人間としてやっていいことと、いけないことの区別はつけている“つもり”だから安心するがいい」

つもりの部分を強調しつつ自信満々に胸を叩き、流し目でウィンクする。正直言って気持ち悪い。

「うう……」

凜が抵抗を諦め、会話の流れも止まる。

焦っていたために忘れていた。幸太郎は自身を変態と公言して憚らない人間なのであった。せっかく反論した凜だったが、その効果は皆無で終わり、それどころか変に幸太郎をパワーアップさせてしまった風でさえある。

「おう、そうだ」

何かを思い出したように幸太郎は椅子から立ち上がった。腰に手を当てたポーズを取り、魅魚の方を見る。

「ところで神谷よ」

「なにかしら」

魅魚は興味なさげに、幸太郎の方は向かずに声だけで返答する。

「おまえのその陰湿かつサディスト的性格を内包するにはアンバランスな口リイな肢体についてじっくり研究したいとオレは思っているのだ」

教室内だというのに幸太郎はとんでもないことを堂々と口にした。教室のどこから「また幸太郎よ」「本当に変態ね」「近づかない方がいいわ」などと囁きが聞こえてくる。

一緒にいる凜の方が真っ赤になってしまふ。なんでこんな男と友達なのだろうと凜はあらためて自分の交友関係に疑問を抱いた。しかし、

「……具体的にはどうしたいのかしら」

相手にしないかと思いきや、魅魚は拒絶することなく、むしろ前向きに話を進めるような返事をした。チャンスとばかりに目を怪しく輝かせて、幸太郎は答える。

「ふむ。そうだな……。誰もいない放課後の教室でおまえの肢体に触れさせてくれ。入念に、丹念に！ ああ、それと記念に！」

この男には理性だとか恥じらいだとかという感情は無いのだろうか。凜は口をあんぐりと開けて二人のやり取りを傍観していた。

「いいわよ」魅魚がまさかの了承をした。

「なに！ 本当か！」幸太郎の表情も爛々と輝く。

「ええ。けれど条件があるわ」

魅魚はアボカドジュースのパックを机に置き、ここでやっと幸太郎の方を向いた。

そして、じつと幸太郎の目を見据える。

「わたしに触れる前に、あなた、自害しなさい」

「ぬわぁにいい！」

幸太郎は両手を上げて身体をのけ反らせる。オーバーリアクションとは思えない、しかし素の驚きを見せた。

「わたしの肢体に触りたいのなら、まずあなたが死体になれという

ことよ」

「触れたい……。しかし、触れるためには死ななければならない。しかし、死んでしまつては触れることはできない！　ぬぬお……。なんとというパラドックス！　ああ……」

そして頭を抱え込み、なにやらぶつぶつと呪文のように「肢体……自害……死体……肢体……したい……シタイ……」と繰り返している。

教室のどこから「また幸太郎君が負けたのね」「さすが魅魚ちゃんだわ」「幸太郎なんて本当に死ねばいいのよ」と囁き声が聞こえた。

「ふふ」

魅魚が微笑し、凜の方を見た。

「この男みたいに積極的な変態になつちゃだめよ。でないとあなたを女装させる楽しみが半減してしまうもの。嫌がるあなたを無理矢理女装させるところに醍醐味があるのだから」

あなたも充分変態です、と言う度胸は凜には無かった。

「僕は、女装なんて好きじゃ……」

ない。と言おうとしたが、しかしそれは意味がなかった。魅魚は聞く耳持たずと言わんばかりに明後日の方角を向いて、再びアボカドジュースを飲み始めていた。

「なあ」

不意に、うずくまっていた幸太郎が立ち上がった。

「凜よ。部活の方はどうなんだ」

「部活？」オウム返しに凜は聞き返す。

凜は剣道部に在籍している。実力はそこそこといったところで、大会では二三回戦あたりまで進出できる程度だが。しかし帰宅部の幸太郎がなぜ剣道部のことを気にするのだろうか。

「夏の大会に向けて、試合に重点を置いた練習をしているくらいで、とくに変わったことはないけど」

「違う、そうではない。練習の内容などどうでもいい。練習のとき

の様子だ。最近はやけに寒い日が続いているだろう。となれば、だ。剣道部の女子部員たちはどういう悩みを抱えていると思う」

霞西高校の剣道部は男女合わせても人数が十人程度のため練習は合同で行っている。凜は実際の練習風景を思い出し、推測してみることにするが、

「うーん……。夏なのに寒いねーって言っているくらいで……。これといって変わったことはないよ」

事実その通りで、なかには「例年なら夏の暑さで防具が蒸れるところを今年は寒いおかげで回避できる」と喜んでいる者もいるくらいだ。

何か問題でもあるのだろうかと思っていると、幸太郎が鼻で笑って言った。

「ふ、当事者だからこそその認識の薄さか……。まだまだ甘いな。よいか……！」

そして街頭演説でもするかのような身振り手振りを交えて熱弁する。

「この寒さで、剣道場の床は凍ったように冷たくなる。足の裏が冷えてしまい、冷え性の女子たちはまともに練習できまい！ となれば、この不肖幸太郎！ かの豊臣秀吉が主君の草履を温めたように、女子たちのおみ足を温めるべく、この手でスリスリすりすり」と

「本当に不肖ね。愚かだわ。愚の骨頂ね」

錐揉みのように手を前後させる幸太郎の暴走に、魅魚が横槍を入れた。

「寒い日が続いていると言っても、凍えるほどじゃないでしょ」

ちなみに、魅魚も幸太郎と同様に帰宅部である。

「く……神谷よ。おまえ……オレの心からの善意を愚弄するつもりか！」

重傷を負った兵士のように胸元を手で押さえ、掠れ気味の声で問う。

「ええ、そうよ。それと心からの善意じゃなくて、悪心からの私意

でしょ」

涼しげに言って、飲み干したジュースのパックを折り畳む。

「いくら神谷とはいえ、もう許さん！　こうなったら強引にでもおま——」

「捨ててきてちょうだい」

遮り、幸太郎の胸元へぞんざいにパックを突き出す。

「くっ……。神谷とはいえ、女子の頼みは断れん。感謝しろ！」

悔しそくに、しかしどこか嬉しそうな表情を浮かべた幸太郎は、紙パックを受け取ると駆け足でゴミ箱へと向かっていった。

「ねえ、凜」

視線を逸らすように流し目を教室の隅に向けつつ、魅魚は凜の名を呼んだ。

「なに？」

「忘れないうちに言っておきたいから、いま言っわ。放課後、部活動が終わったら、この教室へ来て。教室に誰もいなくなってから——。一人で」

「えっ……？」

そのとき、タイミングを見計らったかのように午後の授業開始の鐘が鳴った。

魅魚は、ゆつくりと椅子から立ち、自分の席へ戻ろうとする。

「放課後にひとりで教室へ？　それはどうして……」

小さな彼女の背に向けて問いかける。

魅魚は凜の方へちらりと顔だけ振り向き、

「後で。それに……わたしにだって、心の準備が必要なのよ」

淡い微笑みを浮かべて、魅魚は自分の席へと戻っていった。

2 / 雪降りの夏

竹刀が面を捉える乾いた音が剣道場に炸裂する。

その清々しい快音は幾度となく繰り返され場内に反響している。選手が力強く踏み込むたびに、拍を刻むように重低音が鳴り渡る。

霞西高校の剣道場はテニスコート四つ分ほどの大きさを有しており、十数人程度の部員が使うにはやや広く物寂しさを感じる。

数年前までは部員も多かったのですが、最近では減少傾向にあるため現状の様になってしまっていた。

しかし人数が少ないながらも部員たちは活発に活動を行っており、当然、凜もそのうちの一人であった。

道着の上に、面、胴、籠手、垂れと一式の防具を装着した凜が相手と向かい合っている。男子の中では平均よりやや低めの身長だが、剣道具に身を包めば、なかなか様になっている。

竹刀を中段に構えた。

「やああつ——！」

大きく掛声を上げ、相手との間合いを詰める。竹刀を振り上げる。

「——面ッ！」

勢いよく踏み込むと同時に振り下ろした。竹刀は相手の面の上で飛び魚のように跳ね、飛沫のごとく汗が散る。同時に場内に一際大きな快音が響いた。

相手の脇を颯爽とすり抜けていく。

立ち止まると、身体を反転させ向き直る。

そして再び中段。打突後も油断せず、相手の反撃にすぐさま対応できる心と身の構え——残心を示した。

「よし、やめ！ 今日はこのあたりで終わりにしますっ」

あまみや

道場に、甘くも凜々しい女声が響いた。それは部長——雨宮の声だ。最上級生である三年の部員は女子しかいなかったため、必然的

に女性が部長を務めることになった。その中で彼女が選ばれたのは、雨宮の母性的な性格と、充分な剣道の実力から推薦されたためである。

部員それぞれが所定の位置へつき正座、礼をすると、防具を外していく。

「ちょっといいかな、早乙女くん」

面を小脇に抱えた雨宮が凜に声をかけてきた。

早乙女と苗字で呼ばれると何だが女々しい気分になってしまうなあ、と凜は心の中で苦笑しつつ、

「はい。なんでしょう、雨宮先輩」

慌てて、外しかけだった面と、頭に被っていた手拭いを取り去り脇に置いた。

雨宮は、額に浮いた汗を手で拭くと、うーん……と唸りながら、

「あのね、悪くない動きではあったんだけど……その、なんというか、今日の早乙女くんの打突には迷いがあったかなあって。集中力が欠けているっていうのかな……何か、他に考え事でもしているような感じかな。ねえ、なにかあったの？」

凜自身の手応えとしては決して悪くはなかったつもりだが、雨宮の目にはいつもより鈍っているように見えたのだろう。

雨宮との付き合いはそれほど長くはないが、彼女は人の感情などの機微を察知する能力にたけているという印象が強い。

「い、いえ……とくにそういうことは……ないと、思います」

「そう……。それならいいんだけど……。うん、調子の良し悪しは誰にでもあるもんね。だけど、何かあるんなら、早めに解消した方がいいぞっ？」

凜を気遣う言葉を投げかけ、につこりウィンクを飛ばすと雨宮は軽い足取りで剣道場を後にした。雨宮は男女隔てなく接し、後輩の面倒見も良い。

女子部員全員が道場を出たのを確認し——女子は防具だけ道場に置いていき部室棟の一室で着替えを行っている——凜は道着を脱い

だ。そして、制服へ着替える。

（他のことを考えている……か）

先ほどの部長の言葉を頭の中で反芻する。

部長には何も無いと言ったが、実際には思い当たる節があった。

それは、神谷魅魚のことである。

（わざわざ放課後に呼び出して……いったい何の用だろう）

それも部活が終了してから、他の生徒がいないときにという条件付きである。わざわざそんなシチュエーションにして、どんな話があるというのだろう。

それに、魅魚は「わたしにだって、心の準備が必要なのよ」とも言っていた。

あの言葉が意味するものは何だろうか。単純に考えればそれは……。

（ま、まさか……こ、告白……！？）

あんな性格でも魅魚は一人の女子高生なのだ。もしかしたら、態度では掴み所のない悪戯な女子を演じていても、心の中では凜に好意を寄せているのかもしれない……などという考えが頭を過ぎる。

（いや、でも……）しかし、もしそうだった場合、どう答えればいいのかと凜は新たに悩みだす。

魅魚とは仲の良い——散々いじられてはいるが——友達だ。しかし、それ以上の存在として考えたことなどなかった。魅魚の普段の行動が行動なので余計に。

好きか嫌いかで言えば、もちろん好きだが、それと恋愛感情はまた別物だ。友達以上の存在として見ることはできない。

凜の想像は加速していく。彼女は自分のことを好きなのか……？（……って、そんなわけないか。あの魅魚に限ってそんなわけないよ）

凜は高校にあがってからとはある事情で一人暮らしをしている。そのせいで最近やけにひとりが寂しいと感じるようになっていたからなのか、あり得もしない想像をしてしまった、と凜は自分をバカ

バカしく思った。

けれど、高校生が放課後に異性を呼び出す理由に、他に何かあるだろうか。

もちろん可能性だけならいくらでもあげられるが、じっくりくる答えはいまいち浮かばない。

（とにかく、行ってみよう）

ここで考えていても埒があかない。凜は他の男子部員に挨拶すると道場を後にした。

3 / 雪降りの夏

到着すれば、すでに教室には神谷魅魚の姿があつた。他の生徒はもう残っていない。

窓辺に手を置き、外を眺めていたようだ。風に揺れるカーテンが魅魚の姿を僅かに隠す。

教室には橙色の陽光が窓から差し込み、放課後の気だるさと儚さを漂わせていた。そんな教室に一人佇む彼女の姿は、どこか神秘的でさえあつた。

「待つていたわ」

魅魚は窓辺から離れるように数歩進み、窓際近くの机——それは魅魚の席である——の前で立ち止まる。

「もう……心の準備も、できたから」

小柄で幼げな容姿から想像できるものとは正反対の大人びた口調。凜にはそれがいつもとは違った悩ましい魅力のある声に感じられた。もしかしたら告白されるのでは……などと考えていたからだろ
うか。

高鳴る心臓の鼓動を感じつつ、凜は教室の中へと踏み出す。

そして、魅魚の前に立った。

「用事って、なに……かな」

「……うふふ」

魅魚は妖しく微笑み――。

机にかけてあつた鞆を手に取り、机上に置いた。そして中から、とあるものを取り出す。

「え……？ えええっ！」 凜は声をあげて驚いてしまったが、それも無理はない。

魅魚は、取り出したものを広げ、誇らしげに掲げた。

それは女子用のスクール水着で、

「着なさい」
などと言ったのだから。

4 / 雪降りの夏

結論から言うと、凧はスクール水着を着るのは断った。

スクール水着を着て下校するというのは、男としてという問題以前に人間として踏み越えてはいけない一線だと頑なに主張し続け、なんとか却下した。

魅魚は「せっかく、独自のルートであなたの体格に合うスク水を調達したのに……残念ね」と文句を言っていたが、最早そんなことは関係ない。

ちなみに、彼女の言っていた心の準備とは『凧を女装させる』という自分の趣味のため、凧に人の道を踏み外させてしまうことを決心する、ということだったらしい。

そんなこと勝手に決心しないでよ！ と、いつも言いくるめられてしまう凧のわりには一所懸命の抵抗を見せて、何とか災難を逃れたのだった。

しかし。

帰路についた二人は、ともに女子制服姿である。

魅魚に「スクール水着を着ないなら、代わりにこつちを着なさい」と渡されてしまったのが、数日前に着せられたものと同じ、霞西高校の女子制服だった。これも魅魚が独自ルートから調達したものらしい。

頑張って断ろうとはしたものの、はじめにひとつ頼みを断った手前、次もまた断るのは気が引けるといふ心理が働いてしまい、なおかつ巧みに言いくるめてくる魅魚の話術によって、結局このあり様なのだった。

放課後で時間も遅くなっていたため、人目に付くことなく学校を出ることはできたが、それでも凧の羞恥心はかなりのものだった。真っ赤にした顔を俯かせ、ためらいがちな足取りの凧を見て、魅

魚は非常に満足そうではある。凜の恥ずかしがる様子が魅魚の嗜虐心を刺激しているのではないだろうか。

「ほら、見なさい。あなた、化粧してなくても充分かわいいわよ」
言って、折りたたみ型の手鏡を差し出す。

渋々受け取り、凜は鏡を見た。

当たり前だが、そこには凜の顔が映し出されている。髪型は魅魚の手によって、ヘアピンで前髪を左右に分けて額を出したものに変わっている。即席ではあるものの、女顔の凜にはぴったり似合っていた。女子生徒らしく、可愛らしく見せるという意味において。
「うっ……」自然と、悲観的な呻き声が漏れた。

よくよく考えてみれば女子の制服を着て外を歩くのだって、充分に人としての一線を越えているのではないだろうか……と凜の頭に一抹の不安が過ぎる。

（だけど……）

鏡を見ながら凜は思った。

（僕って、本当に女の人みたいな顔をしているなあ……）

普段は特に何も考えない無造作な髪型だが、今は魅魚によるアレンジが加えられている。

髪を下ろし、クシで丁寧に梳いたあと、ピンクのヘアピンで前髪を留めただけの簡単なものでも、充分に女性に見えるのだ。肌がきれいということもあるが、顔の造りそのものが女性的だ。

中性的ともまた違った、まるで男の子の顔として描き始めた絵を途中から女性に描き直したような、そんな顔立ちだった。

（なんで僕はこんな顔なんだろう……）

決して自分の顔が嫌いなわけではないが、それでも不思議に思う気持ちは確かだった。

「どうしたの。黙りこんで」

魅魚の声に、はっと気づけば、そこは交差点だった。

「それじゃ、わたしはあっちだから。また明日ね。うふふ」

楽しそうに、策士めいた笑みを浮かべると魅魚は交差点を渡って

いく。後ろ手に組んで鞆を持つ小さな後ろ姿が、さらに小さくなっていく。

ぼうつとしたまま魅魚を見送り、彼女の姿が見えなくなったところで、凜はひとつの事実気がついた。

「どうしよう……！ 僕、ひとりだ」

この状態で、男が女装して外を歩いていることがバレたらどうなってしまうのだろうか、と不安が急激に膨らみ胸の内を制していく。寒いからか今は幸いにも通行人はいない。ときおり車が通り過ぎるが、さすがに車内から気付かれることはないだろう。しかし、いつ誰がここを通ってもおかしくはないのだ。

もし気づかれれば通報されてしまうだろうか。「きゃー変態よー誰かー」と警察に連絡され、しまいには『女装好き高校生、街を練り歩く！』なんて報道をされてしまうだろうか。そうなっても元凶である魅魚はくすくす笑って傍観者に努めそうで怖い。

そんなことを考え、凜は最も単純な結論『とにかく急いで帰る』を導き出した。

鞆には自分の学制服が入っているため、公園のトイレにでも駆け込んでそこで着替えるという手もあるが、公園へ行くには今来た道を戻る必要があるし、ここからなら自宅のアパートの方が近い。他に着替えができそうな場所も思いつかない。さすがにコンビニやファーストフード店のトイレを借りるわけにもいかない。

（トイレで変身するヒーローってけっこう大変なんだなあ……）

凜は、微妙にズレた感想を抱きつつ、家へ帰るべく歩き出した。

——ふと、胸が苦しくなった。

（ああ……）

凜は胸に手を当てる。決して肉体的な痛みがあるわけではない。これは一人になったことによる孤独感が生み出す精神的な心の痛みであった。

ときおり凜の胸はこのように痛みだす。それは決まって心が独りを感じたときだ。

凜は幼い時に両親を亡くしている。親戚に引き取られるという家庭環境で育ち、その延長で今は一人暮らしをしている。そんな背景を抱える心の孤独が引き起こす心因性の痛みなのだった。

昔はとくに酷かった。友達のいなかった凜は常に孤独状態にあり、常に胸の痛みに苛まれていた。高校へと進学した今でこそ、魅魚や幸太郎という友人ができ、痛みが発現することも少なくなったが、それでも完全に解消されたわけではない。

友人ができた今でも、心のどこかで一人ぼっちを、孤独を感じてしまうのだ。それは凜の求めている安らぎが友人関係よりさらに深い心の繋がりからでないと生まれないものだからなのかもしれない。「気にしちゃいけない。早く帰ろう」

凜は手で胸をとんと叩き、頭を左右に数回振る。それを気分転換がわりにして、再び歩き出した。

——と。

「え？」

鼻の頭に冷たい感触がした。小さく柔らかい何かが落ちてきたような——水のように、それでいて形のある冷たいもの。

それが空から降ってきたのだと気づき見上げれば、

「こ、これは……？」

雪が降りだした。

いつの間にか曇天のため灰がかった空から、真っ白な無数の雪が音もなく舞い降りていた。

凜は疑問に思った。当然である。確かにここ数週間は寒い日が続き、日を追うごとに冷え込んでいくようになってきていたが、それでも季節は夏だ。七月初旬のこの時期、雪が降るといっては度が過ぎている。異常でしかない、と考えた——そのとき。

ふと、視線を感じた。

凜は、前方に誰かがいることに気づき、顔をあげる。

「な……っ」

凜の位置からほんの五メートル分ほど離れたところ、横断歩道の真ん中に一人の女性が立っていた。

彼女はゆっくりとこちらへ向かってくる。

ひと目見て、普通じゃないと感じた。

その女性は裸足で、純白の和服に身を包んでいた。色が白という点もそうだが、それだけでなく大きなスリットが入っているという点でも変わった和服であった。光沢のある黒い帯もまた、白い和服によく映えている。

「……………」

一歩。

無言のまま女性はゆっくりと近づいてくる。スリットからのぞく白い足は、今降っている雪と同化してもおかしくない程にまばゆく優美な白。

そして最も特徴的なのは、腰まで伸びた銀色の長髪だった。鮮やかな銀のそれは決して老いややつれを感じさせず白髪のようなものではなく、彼女の美しさを飾り立てるように寒風に乗って優雅に揺れていた。彼女の姿はあまりにも美しく妖艶で、異質さに危険を感じつつも、思わず見惚れてしまうほどだった。

「……………」

また一歩。

年上なのは間違いないが、具体的な年齢はわからない。美少女と美女の中間のような、どこか可愛らしさを残した端正な顔立ち。その瞳には髪と同じ銀色の光が宿っていた。

不思議な光を奥に宿した銀の瞳。

いや、光って見えたのは気のせいだったかもしれない。しかし、そう感じるほどに美しく透き通った、まるで人の心を吸い込み虜にしてしまうような、妖しい光。

いつの間にか、その女性は凜の目の前に立っていた。

目と鼻の先に、圧倒的な美を持つ彼女の顔がある。しかし、その

表情はどこか虚ろで――。

「――！」

女性の銀色の瞳に強く見据えられた瞬間、まるで身体が凍り付いたように動かなくなった。

逃げ出したかった。しかし、逃げられない。足は動かない（まるで凍って……）。身体も動かない（凍ってしまったみたいだ……）。

「あ、あ……あっ」声にならない声で凜は必死に叫びをあげる。

氷のような冷たさを感じさせる銀色の瞳、美しい銀の髪、凍り付けのように相手を動けなくする力、雪を背景に佇む純白の和服姿。凜は思った。

まるで――雪女じゃないか、と。

そのとき女が小さく口を開いた。

金管楽器のように透き通りながらも、しかし衰弱しきった声で、

「飯を……くれ」

1 / 女装遊戯

早乙女凜はアパートでの一人暮らしだ。

幼い頃、凜は両親とともに雪山へ登山に行ったのだが遭難してしまい、その事故によって両親は他界した。それ以来、ひとり残された凜は田舎に住む祖父からの仕送りを受けながら生活している。

中学卒業までは親戚の家で面倒を見てもらっていたが、高校入学を機に一人暮らしを始めた。

いつそのこと田舎で祖父母たちと暮らそうかと考えた時期もあった。

しかし、そこから通える学校がなかったため、高校を卒業するまでは霞町で一人暮らしをするということで落ち着いた。

アパートは八畳一間と学生が一人で暮らすには十分なものだった。仕送りの額にも不満はなく家賃や生活費には困っていないが、祖父に何故それだけの資産があるのかを凜は知らない。

「えっと……食べもの、食べもの……」

凜は冷蔵庫を開けた。交差点で出会った女性に食べ物を出すためだ。彼女は今、凜の部屋で待機している。

出会いこそ恐怖を感じさせられるものであったが、危害を加えてきたわけではないし、何より彼女は非常に衰弱しているようだった。そんな相手をむざむざ見過ごすことなど凜の性格ではできるはずもなく、肩を貸して自分のアパートまで連れてきたのだった。

「うわぁ……何もない。そういうば、今日の帰りに買い物に行こうと思っていたんだっけ」

魅魚の謀略や、交差点で出会った美女のことですっかり失念してしまっていた。

冷蔵庫にあるのは烏龍茶と、魅魚が遊びに――凜を女装させに――来たときに出すためのアボカドくらいだ。

アボカドは一応魅魚の所有物となっていてるので勝手に出すわけにはいかないし、烏龍茶は凜の物だが飲料で空腹を満たせというのはさすがに酷だ。

「となると……」

凜は冷蔵庫の扉を閉め、上の段の扉へと手を伸ばす。冷凍室になら何かあるかもしれない。

扉を開けば、ひんやりとした冷気がゆっくり漏れ出て顔を撫でていく。

一瞬、交差点での出来事を思い出した。あの女性が目の前に立っていたときと似たような感覚を覚える。

「好き嫌いとか、あるのかな」

中には何種類かの冷凍食品がある。

数秒考えた後、中からコロッケとチャーハンの袋を取り出した。

特に変わった食べ物ではないのでどちらでも構わないと言われそうだが、苦手という可能性も否定はできない。どちらがいいか選んでもらおうという考えだ。

凜は女性の待つ部屋へとむかう。

「あの、どっちがいいですか……う、うわあ！」

引き戸を開けてみれば、女性は部屋の中央でうつ伏せに倒れていた。

思わず息をのむ。

純白の和服を着て、銀の長髪を乱れるように広げて倒れている姿は、まるで変死体のように見えたのだ。

「お、驚いている場合じゃない。大丈夫ですかっ？」

凜は手にした冷凍食品をとりあえずテーブルに置くと、倒れた女性を抱き起こした。触れた身体はとても冷たかった。その冷たさに、

「し、死んじゃった！ ど、どうしよう！」

慌てふためくが……。

「う、う……」

女性は、辛そうに目を開いた。生きていたようで安心すると同時に、ここへ連れてくるために肩を貸した時も、彼女の身体がやけに冷たかったことを思い出す。

数回、目を瞬いた彼女は、端正な顔立ちに備えた美麗な銀の瞳で凜を見ると、

「飯を……」

出会ったときと同様、空腹を訴えた。

「あ、は、はい。あの、どっちがいいですか」

そう言つて、一旦テーブルの上に置いた冷凍食品を――

「飯いつ！」

取ろうとして、先に奪われた。

彼女は横取りした勢いでテーブルの上へ飛び乗り仁王立ちする。

高々とチャーハンの袋を掲げ、下から覗き込むように何やら観察していた。

元々この女性に渡すつもりだったので問題はないが、

（よっぽど、お腹すいていたんだなあ）

のほほんと、そんな感想を抱いた凜の目にまさかの光景が飛び込む。

「よし」女性はその場で袋を開けると、中身を取り出した。

まだ冷凍状態のチャーハンを包む半透明の包装に、白く細長い綺麗な指を突き立て――破った。

「ああー！」

当然の如くチャーハンが散らばった。凍っているため、いくつかのブロックにわかれたチャーハンの塊が、畳の上に飛散していく。

「おお」

女性はそれを拾うがチャーハンの塊はポロポロと崩れ、手からこぼれ落ちる。

「これは……食べぬ」

啞然とする凜をよそにぼそつと虚しく呟くと、今度はコロッケの

袋へと手を伸ばした。チャーハン同様、その袋を粗雑に引き破る。だが今回はコロッケである。崩れることも、こぼれることもなく小判型の、しかしまだ凍ったままのコロッケが彼女の手中に収まった。

「ふむ……」

天井に掲げてみたり、見る角度を変えたりしながら、見定めるような表情を彼女は浮かべている。そして、

「いただくぞ」

一言放ち、ぱくり——と。一口で平らげた。

「え？ あ、あの、レンジでチンは……？」

「うむ。美味だ！ これはうまいぞ！」

どうやら凧の問いに答える気はないらしい。

冷凍コロッケ（未解凍）の味に満足したらしく、二つめ、三つめ、と手にとり食していく。

どう見てもコロッケは冷凍だ。それには、まるでおしろいで化粧したかのような白い霜がついている。お腹壊さないかな……と凧は心配になった。

「おお……久方ぶりに人里へ下りたが、こつも良質な食に巡り合えるとは……」

いつの間にか冷凍コロッケはなくなっていた。すべて彼女の腹の中に収まったようである。補足だが、一袋につきコロッケは六個入っている。

さすがに全部をあげるつもりではなかったのだが、とりあえず喜んでいようなので凧は結果オーライと自分に言い聞かせる。

彼女の要求も満たせたことだし、だいぶ元気になったように見える。

ここで凧は気になることを尋ねることにした。

「あの……あなたはいつたい、何者なんですか……？」

至極真つ当な疑問だ。どう見ても普通じゃないことだけは確かだった。その銀色の髪、その銀色の瞳。放たれる独特の雰囲気。

「うちか……？」

『う』の方にアクセントを置いた一人称で、このあたりの人間にしては珍しい発音だなと凜は思った。

「ふむ……」

女性は、銀色の目を細めて数秒、黙考し、

「わからぬ！　うちは何者なのだ！」

威風堂々、言い放った。

「え……」

あんまりな返答に、さすがの凜も顎が外れんばかりに口を開けて驚いた。

「まあ待て。半分は冗談だ。そう焦るでない」

ぽん、と凜の肩に手を乗せると、にこやかに明るいう調でそう言った。彼女を初めて見たときに感じた冷淡で恐ろしい雰囲気とは正反対の印象だった。

「しかし、うちのような存在にこれといった明確な呼称が無いのも確か。そもそも、こちらはそなたら人間のように群れて生きたり、必要以上に他の生き物に干渉したりすることはせぬのだ。わざわざ他と区別するための名称など無くとも、それほど気にはならぬしな」
凜は彼女の言葉に違和感を覚えた。「そなたら人間のように」ということは、裏を返せば自分人間ではないという意味になる。凜の胸に灯った不安が少しずつ膨らむ。

「だが……。うちが以前、人里へ下りてきたときには——と言っても何十年と昔の話だが、そのときにはこう呼ばれたものだ」

彼女は一瞬、かっと目を見開き、

「——雪女だ、と」

潜在意識に畏怖を植え付けるような力のこもった視線が凜に突き刺さる。

「ゆき……？」

凜は恐れで身をすくませた。

「はっはっは。そう怖れるな。そなたをとって食ったりはせぬし、凍り付けにするつもりもない」

安心し、ほっと胸を撫で下ろす。凜をからかっているようだ。もしかしたら雰囲気とは裏腹に冗談が好きなのかもしれない。

「でも、雪女なんて……本当に……」

いるのか、と疑いたくなる。まさかそんなものいるわけがないと目の前にいる女性の異質さを実感しつつも凜の常識がそれを受け入れることを拒む。

「あくまで人間の想像する雪女に近いたため、便宜的にそう呼ばれておるだけだ。伝承通りの雪女というわけでもない。しかし、ほぼ同一と思っても、それはそれで間違いではない」

と、彼女は形のいい眉をくいと吊り上げる。

「なんだ。その恐怖に慄くような顔は」

「い、いえ……その」

凜の心理は見透かされているようだった。人ならぬ者などという存在を信じられないという懐疑心と、もしそれが本当だった場合に自分の持っていた常識が壊されてしまう不安だ。

「ふむ……うちが恐いのか。ならば、これでどうだ」そう言って、軽く指を弾いた。

その音を合図に、彼女の美麗な銀髪が、だんだんと色素を濃くしていき、やがて艶のある黒髪へと変わった。瞳の色も、銀から茶色へと変わっていた。

目の前で起きた出来事に凜は困惑を隠せない。しかし、最も目を奪われたのはもっと別の点であった……。

（お、大きい！）

今まで特に何の主張もすることのなかった彼女の薄い胸がみるみる膨らんでいく、という光景だった。

和服だというのに、はちきれんばかりの存在感をアピールするその悩ましい胸元。内から押し上げられたために和服ははだけ、見事

な谷間がのぞいていた。

美女と美少女の両方の性質を併せ持ったような顔立ちに、大人の色気を全開にしたその姿は反則としか言いようがなかった。

「どうだ。できるだけ一般的な人間の姿に似せてみたぞ。これならば、怖くないであろう？　人間の身体のひとつが水分であるように、雪女であるうちの身体的大部分は雪でできておるからな。雪を繰る術を使えばこの程度、朝飯前なのだ」

先程とは別の意味で、特定の部分が一般の域を超えてしまっているが、彼女は満足そうに、彼女自身の姿——主に胸のあたりを眺めている。

ただ、確かに姿そのものは異質ではなくなった。恐怖はいくらか薄らいでいた。

「あの……」

しかし、それで疑問が解決したわけじゃない。彼女は本当に雪女なのか。姿を変貌させるといふ不思議を起こしただけでも充分納得させるに値するのだが、凜は未だに信じきれない。それを伝えようとして、

「あのー……」

そこで気づいた。

（名前がわからない）

やはり名前を知っていた方が会話も円滑に進む。そう考え、先に名を尋ねることにする。

「あ、あなたのお名前を聞いてもいいですか？」

「ふむ——。名を尋ねるならば、まず自ら名乗るのが礼儀というものだぞ」

「あ……。す、すみません」

はっとして凜はぺこぺこ頭を下げた。

「えっと、凜です。早乙女凜っていいいます」

「早乙女？　そなた……いや、まあよい。うむ。凜か。よい名だ。では、うちの名だな……」

黒髪へと変わった美女は、しばし沈黙し、

「わからぬ！　うちの名は何だ！」

思わず凜は目を丸くした。

「ま、またそれですか？」

「んーむ……。あまりうけなかったか。まあ、落ち着け。冗談だ」
さつきと似たようなやり取りのあと。

「これも人里に下りてきたときの話なのだが……。そのとき出会った男に、雪音ゆきねという名を頂いた。以来、うちはそう名乗ることにしておる。なかなか芯のある良い男だったな」

雪音は天井を見上げ、懐かしむような笑みを浮かべた。

「ゆきね……。さん、ですか」

彼女の名を口にしてみる。なんだか曖昧に、漠然と懐かしい響きを感じた。

と、急に雪音が顔を近づけてきた。

目と鼻の先。それこそ鼻の頭がくつきそうなほどに近い距離。思わず心臓の鼓動が速くなる。

「どうした。ぼけーっとしておって。……。おお！　まさか……。そうか。そなた、うちに名を与えた男のことが気になるのだろうか？」

どうやら雪音には、凜がその男性について考えているように見えたらしい。

「あ、え、えっと」

目の前で煌めく美顔に気を奪われ言葉を失ってしまった。
嬉しそうにほほ笑む雪音の顔は綺麗だけでなく人懐っこい魅力があった。

突然縮められた距離に戸惑い、言葉を返せない凜に構わず雪音は続けた。

「なに、顔はたいしたことない。しかし男気のある奴だった。うちが男で唯一、他愛もない会話をすることを許可した者だからな。会えば……。そなたは惚れてしまうかもしれぬぞ？」

ははは、と茶化すように笑みを向けてくる。……。しかし、それよ

りも凜は、彼女の言葉に覚えた違和感の方が気になった。

「さて。まだ、うちが雪女だと信用できぬのであろう。見せ物ではないから一度限り。その目を見開いて、とくと見るがよい」

雪音が茶色へと変わった瞳を閉じる。次の瞬間には、だんだんと黒髪が銀色へと戻り始めていた。そして完全な銀髪へと変わると同時に。

—— かつと目を見開いた。

そこには、あの銀の瞳が爛々と揺れていた。

銀の髪、銀の瞳。これが雪女の姿、なのだろうか。

ちなみに胸は小さく……いや、まな板のように薄くなっていた。

さっきまでの豊かさを失ったことで生まれた差分により、和服の間からあまり抑揚のない白肌が見えた。

（—— って、僕は何を見ているんだ。ダメだダメだ）

すぐさま胸元から視線を外し、彼女の顔を見る。

ずっと、彼女は無言で腕を伸ばした。

雪音の手は凜の肩へと触れる。柔らかく、しかし冷たい感触が伝わってきた。

そして、ぐつとその手に力がこもる。

「——」

よく聞き取れない小さな声で呪文のような言葉をつぶやき、

「う、うわあっ！」

突如、異変が起き、凜は思わず驚きの声をあげた。

自分の肩に、まるでサンゴのような形の、太く刺々しい氷の塊が生えていた。さらにそこを起点に氷の面積は拡大していき、凜の腕を覆っていく。

「う、うわああ！」

一気に左腕の熱、感覚、自由が奪われていく。ひりひりと焼けるような痛みが走る。恐怖が脳裏を掠め……

「はっはっはっ！ 思った通りの反応をするのだなあ、そなたは。わかりやすいやつだ！」

透き通った雪音の笑い声が部屋に響いた。

肩に出現した氷は粉々に砕けて畳の上に落ちていく。腕の氷もぱらぱらと剥がれていった。思わず自分の腕に触れて確認してみた。凍だった。とくに凍傷のようなことにはなっていないようだ。

「び、びつくりしました……」

気づいたときには、彼女の姿は黒髪、茶色の瞳、豊満な胸、と彼女いわく一般的な人間の姿に戻っていた。

「雪女らしいことをしてみたぞ。どうだ。凍り付けなんてわかりやすいことこの上ないであろう」

「は、はい……」

雪女というよりは魔法使いのような印象を受ける手荒い証明だったが、ここまでの超常現象を見せられて首を横に振るわけにもいかなかった。

完全に信じ切るとまではいかなくとも、しかし疑う必要もないと結論した。

「と、ところで…… どうして、あんなに疲れきっていたんですか？ 本当にお腹がすいていただけなんですか？」

いちおうの納得をした凛は、次に交差点でのことを問う。

あのとき雪音は非常に衰弱していた。それこそ死んでしまうのではないかというくらいに。彼女は空腹だったと言っていたが、それにしては冷凍コロッケを平らげただけで、ずいぶん回復しすぎているような気がする。六個すべて食べたとはいえ。

きつと、実はもっと深い理由が――

「腹が減っていたただけだな」
なかった。

「うちの場合、食べる量も然ることながら、それ以上に質が重要なのだ。この――」

雪音はテーブルの上に放り捨てられていた袋を見る。

「冷凍コロッケですか」

「そう！ 冷凍ころつけ。これは非常によい！ うちの身体にしくりぴったりの逸品だ！」

雪音は、空になった冷凍コロッケのパッケージを愛おしそうに見つめている。

「本来ならば、雪女は人間の男の精気を吸う。精気とは人間の生命力。それを吸うことで活動するための力を得るのだ。吸血鬼やサキユバスと似たようなものだな」

「男の人の精気を吸って、力にする……」

凜は伝承の雪女を思い出す。

伝承と一口に言っても種類は様々だが、たしかにその中には人間——とくに男の生命力を吸って奪うというものもあつたなと心の中でうなずいた。

「精気は目に見えるものではなく概念的なもの。人間のもつ生命力の根源、体力のようなものと思えばいい。

うちが男の精気を吸っておれば……あのよう道端で疲弊しきり、そなたに助けを請うようなこともなかったのだが……。しかし吸うためには、まず男を虜にしなければならぬ。虜にするというのは、男を誘惑し、魅了し、その果てに凍り付けにすることだ」

本当に伝承の雪女みたいだな、と凜は思った。

しかし、それならなぜ男である凜の精気を吸わずに普通の食べ物要求してきたのだらうと新たな疑問が浮かんでくる。

凜が思案する間も雪音は言葉を続ける。

「虜にすること自体は雪女にとって造作もない。凍り付けにする能力は当然のこと、さらに誘惑するための容姿や魅力も個人差はあるが皆持つておる。しかしな……凍り付けにするにも、そして精気を吸うにも……その……しなければならぬのだ」

雪音はとたんに顔を赤らめ、言いくそうに言葉を詰まらせる。

「する……って、何を、ですか？」凜は先が気になり尋ねる。

「んう……。そ、その……せ、せ、せ、せ」

そして、意を決したように雪音は言った。

「接吻をしなければ、ならぬのだ……」

言いきって、とたんに顔の赤さが増す。そつと顔を伏せた。

あまりの赤さに、雪女なら熱で溶けてしまったりしないだろうか
と心配になる。

「な、なるほど。男の人と、その……き、キスするのが、恥ずかしいんですね」

凜もそういった単語は苦手だ。今まで縁がなかったせいもあるだろう。しかし、雪音は、

「違う！ 恥ずかしいわけではない！」

力一杯に否定した。その語気の強さに、それが強がりなのかそれとも本当に別の理由があるのか判別しづらくなる。

「うちはな……。大つつつ嫌いなのだ！ 男という生き物がっ！」

剣道さながらの踏み込みの音をたてて、雪音はテーブルに片足を乗り上げた。そして握り拳に力を込める。

「うちは、そなたら人間で言えば十歳ほどの頃に初めて人里へ下りた。人間の精気を吸う練習をするためにな。しかし、うちが目を付けた人間の男は……。うちに誘惑されたあと、こともあるうちに……。全裸になったのだ！ うちが接吻をためらってしまい、凍り付けにするのが遅れたせいで動く隙を与えてしまったのだ。成人している男が……。相手が雪女とはいえ、誘惑されているとはいえ……。！ まだ十歳ほどの少女にむかってだぞ！ ああー信じられぬ！ 思い出しただけで腹が立つ！ もちろんうちはそんな者の精気など吸わなかった。うちはな、そのときに決めたのだ。こんな汚らしい生き物の精気など絶対に吸わんとなあ！」

「な、なるほど……」

一気にまくし立てるように言う雪音の、ある意味凜々しい姿は圧巻だった。

「うちは男が大っ嫌いなのだ。接吻どころか近寄りたくもない。そのため精気を吸わずとも食糧から力を汲み取り、精気へ練成でき

るよう必死に修行した。だからこの冷凍ころっけでも十分な精氣を得られるのだ。ま、この食材は精氣を補って余りあるほどの活力に満ちておるがな」

言い終えると彼女は満足したのか、テーブルから足を下ろす。そして凜の前に腰を下ろすと胡坐あぐらをかいた。スリットがついているため和服でも胡坐になれるのだが、片足が完全に露出しており目のやり場に困ってしまう。

「なるほど……そうだったんですか」

なんとかその美脚から意識をそらし、雪音の目を見て答えた。

しかし雪音の説明はきちんと理解した。

雪女は活動するためのエネルギー源として、人間の男から精氣を吸わなければならない。だが雪音は過去のトラウマによって男を嫌っている。だから精氣を吸いたくない。しかしそれでは力を消耗していく一方になり……そうして衰弱してしまった状態の雪音を凜が見つけたというわけだろう。

男の精氣を吸うかわりとして食糧から精氣を得る方法を獲得していたようだが、自分の暮らす雪山でならともかく、人里ではその食料自体を得られなかったのだろう。

（僕の精氣を吸わなかったのも、僕が男だからか……。さっきの違和感はこれかな。あれ？ でも、待てよ……なにか、おかしい）

凜は、雪音の言葉を思い出す。そこにまた、引つかかるものを感じ、その原因を思案する。

と、一呼吸置いて冷静になったのか、雪音は自分の胸に手を当て、落ち着いた口調で続きを話し始めた。

「数十年前——五十年ほど前だったか——にちよいとした用があった。人里を訪れたのだがな。そのときに、うちに名を与えた男に出会った。まあ、接吻などしてやるわけもなく、ただ単に口を聞いてやっただけだ。色々と事情があったからな。それが唯一の例外で他の人間の男とは会話すらしておらぬ」

（雪音さんに名前を付けたっていう人が、男性だったから……じゃ

ない。引つかかったのはそこじゃなくて、もっと根本的な……)

凜は、雪音の言葉を聞きつつ、引つかかっている何かについて考える。何か腑に落ちない。符号が合わない。

「とにかく。そんなわけで、三日ほど前に人里から降りてきたはいが、男の精気など吸いたくなくなかったうちは、人里に下りても力の補給ができず、食糧もなかなか手に入らず、衰弱した。人里に人間は人間の姿をしていた方が良いということくらい、うちも理解しておる。

しかし、それが力の消費を速めてな。人間の姿を維持するのにも力を使うのだ。そして、人間の姿になる力さえ使い果たし、雪女の姿へと戻り、倒れるか倒れないかの瀬戸際に陥ったところでそなたを見つけたというわけだ。うむ——感謝しておるぞ」

助かったことへの安堵を漏らす雪音は自分の胸元に持っていた手をふわふわと動かす。

雪音と話せば話すほど、違和感は大きくなっていく。答えは喉元辺りまで出かかっているのに出ないような、そんなもどかしい気持ちになる。——のだが、その前に。

凜はたった今日についての雪音の行為の方がどうにも気になり、尋ねた。

「あの、さつきから何しているんですか」

「ん。なにって」

雪音はさつきから、人間の姿になった際に大きくなった自分の胸を和服のうえから揉んでいた。

最初はただ手を置いたり撫でたりしているだけだったが、今は明らかに揉んでいる。しっかりと、その弾力を味わうように。純白の和服の上からあてられた綺麗な手が、自由気ままに胸のうえで舞っている。

「よいではないか。うちはな……実のところ、そ、それなりに……かわいい顔をしておるかな……なんて自負しているのだが」

また頬を赤らめ、戸惑い気味な、あどけない少女のような口調で

雪音は言った。

「ひとつだけ……その、劣等意識を持っているものがある。あまり人には言いたくないのだが、そなたは命の恩人だし……それに」

雪音は、なぜか凜の胸元に数秒視線を注ぎ、

「うむ———うちの気持をわかってくれそうだから言うが……。う、うちは……じ、自分の胸がべったんこなことを気にしておるのだ……だから、人間の姿になったときくらい胸を大きくしたいし、それを感じて感触を味わいたいのだ。この気持ち、そなたもわかるであろう?」

「……え?」

雪音の言っていることがうまく飲み込めない。気持は推察するがしかし……。

「よかったよ。あそこに立つておったのが、うちの大嫌いな汚らしい男でなかったうえに、うちと同じく、胸の起伏の乏しい少女で、恥ずかしそうに雪音は白状する。だが同意を求められても自分は女性ではない。共感できるかと言われても……と、困惑する。困惑して……。

(……あ、ああ……あーっ!)

凜は今までの雪音の行動、言動、そして今の台詞で、感じていた違和の正体に気がついた。

(雪音さん……僕のことを女の人だと思ってる!)

彼女の一連の言動、行動、そのすべては、凜が女性だと前提されてのものなのだ。男である凜が違和感を覚えるのは当然だった。

(でも、なんで僕を女の人だと……?)

確かに自分は女顔だが、ここまで誤解されてしまうほどののだろうか……と考え、しかしその疑問の雲は二秒で散った。

(原因はこれか……)

凜は、未だに女子制服姿のままだった。

男女による制服の違いを雪音が知っているかどうかは定かではないが、様子から察するにおそらく知っているのだろう。

さらに前髪はピンクのヘアピンで留め、本来男性であるため胸の起伏こそはないものの、スカートからは雪音ほどではないが細く長い綺麗な足が伸びている。

凜はとても可愛らしい女子高生と呼称して差し支えない姿だった。雪女という異質な存在の登場に、凜はそのことをすっかり失念していた。

そして、そのことに気づいた今、さらに新たな疑問が生まれる。

(……もしも、僕が男だって知ったら……)

雪音は凜が女だということを前提に話をしている。食料を与えた命の恩人ということもあるだろうが、それ以上に、凜を女だと思っているからこそ、ここまで心を開いて色々と話してくれたに違いない。

そのうえ雪音は男が大嫌いだと宣言している。曰く「大つつっ嫌いなのだ」である。凜が実は男であるとバレたら一体どうなることか……。

まさか魅魚の悪趣味がこんな形で影響を及ぼしてくるなんて……と、凜は自分の悲運を恨めしく思った。

「んう……？ どうした、浮かない顔をして」

「い、いえ……あの、雪音さん」

「なんだ」

「もし、ですよ。もし、男の人が雪音さんに近づこうとして、女の人に変装して接触を図ったりしたら……どうしますか」

「殺す」

恐る恐るの凜の質問を雪音は即座に切って落とした。その間はコンマ何秒の世界。雪音の男嫌いは相当のものらしい。

たしかに、雪音の過去の一件を聞く限り、そうなってしまいう気持はわからなくもないが。

「男であるうえに女に化けて接近を試みるなど変態の極地。断じて許せぬ。氷の槍で心臓を一突きにして殺してくれよう！ くあー許せぬ！ ああ想像しただけでなんだか胸の奥底で怒りが沸々と……」

雪音の美麗な顔立ちが怒りに歪む。ふと見ると両の拳は固く握られていた。

「しかし、何故そなたがそんなことを聞くのだ？」

「えっ……いや、その、あの、べつに」

突如、矛先が自分に向けられ凜は困惑の色を隠せない。とつさに両手を上下に振ってごまかしてみるが焦りは加速する一方だ。

「んう……？ ま、まさかそなた！」

はっとして凜の目を見つめた。

気づかれてしまったか、万事休すか。凜は力一杯に目を閉じ、死を覚悟する。

「わひいっ！」

猛然と肩を掴まれた。そこにはかなりの力がこもっている。僅かな身動きさえとれそうにない。死……。

「そなた……女装男に言い寄られておるのか！」

雪音はまったく逆方向に誤解していた。

「くうく許せぬ！ わかった、そやつに悩まされておるのだろうか？ だが安心しろ。うちがいるからにはもう大丈夫。そのような男が現れたなら巨大ツララで身体をひと突きにっ……！」

「い、いえ、そういうわけではないですからっ！」

「んう……そうなのか？ まあ、それならよいが……」

暴走気味の雪音だったが、どうやら凜を心配してくれていたようだ。

凜が実は男だということもバレていない。これほど自分のことを気にかけてくれる相手に対して、騙しているようで申し訳ない気持ちもあったが、悪意があつて女に扮していたわけではないのだ。これは事故のようなものと自分に言い聞かせることにした。

あとは、いつ雪音に帰ってもらうか、切り出すタイミングを見計らうのみである。

空腹を満たすことができたのだから、当然、雪音はここを出ていくはずだ。

2 / 女装遊戯

雪音はここを出ていく……はずだったのだが。

「さて、なんだか眠くなってきた」

雪音は限りなく自然な動きで畳へ横になった。そこで寝るのが当然のように。

凜はきょとんとした顔になりながら尋ねる。

「も、もしかして、ここに泊るつもりですか？」

「そうだが……なんだ？ ……まさか、うちがここにいるのが嫌かつ？ 嫌なのかつ？」

跳ねるように起き上がると、なんとも悲しそうな潤んだ瞳で訴えかけてきた。

半分ふざけているのだろうが、そう言われてしまったては断れるわけがないことをわかって言っていそうなあたり性質が悪い。

しかし雪音が「雪女は群れて生活しない」と言っていたことを凜は思い出す。そこから推察すると雪音も凜と同様ひとりなのかもしれない。

どこかうら寂しさを感じさせる雪音の顔を見てしまうと、孤独というものに対して敏感な凜が、彼女を放っておけるわけもなかった。雪音に対してある種の共通点を感じたのかもしれない。

「嫌なわけではないです。どうぞ、泊まっていてください。布団もお貸ししますから」

「そうか、なら安心だ。そなたは良い嫁になれる。しかし布団はいらぬ。あれは暑くなるだけだ。厚意だけ受け取っておこう。うちはここに直に寝る。布団より畳の方が涼しいのでな」

そう言って雪音は再び横になった。

凜は、目を閉じた彼女の顔をちらりと見る。

とても穏やかな、優しい寝顔だった。

（……雪女、か……）

多大な魅力で男を誘惑し、虜にして精気を奪う雪の妖怪……と凜は想像する。

（たしかにこれだけ美人なら、男の人はあっさり虜になっちゃいそうだ……）

事実、凜自身も話しているときは雪音にドキドキさせられっぱなしだった。

容姿だけでなく、彼女の言動や行動、その性格にも、本能レベルで心を揺さぶってくるような魔的な魅力を感じていた。もちろんそれは彼女が雪女として男を誘惑するために備えている容姿や能力に大きく影響されているものであって、凜の抱いている気持ちが恋愛感情の類のものかと問われれば違うのだろうが……。

さて。凜は気持ちを入れ替え、当面の問題について考える。すなわち、雪音が凜のことを女だと思ってしまうということについてだ。

男嫌いな彼女のためにも、自分の身の安全のためにも、本当のこととは言わない方が良さだろう。雪音の前では女を演じる他ない。

このまま住み着いてしまえばそんな感さえある雪音には、頭を悩ませられそうだ。

（もしかしたら、魅魚に助けを借りる必要もあるかもしれない……。うう、ぜったい面白がってからかうんだろうなあ）

すでに悩みは二倍三倍へと膨れていた。

「暑い……」

ふと、雪音が顔を上げて小さく呟いた。

「え、暑いですか？」

「うむ……」

彼女はゆっくり身体を起こし、

「暑くて溶けそうだ。なんとかならぬか」

気だるそうに問いかけてくる。

こここのところ寒い日が続いているため、凜にしてみれば暑いとは

思わないというのが正直な感想だが、雪音は雪女だからこれでもまだ暑いのもかもしれない。和服を着ているのだから尚更だろう。

かといって着替えればいい、とも言えない。代わりに着せる服などないからだ。男物の服を渡してしまえば、それをきっかけに正体に感づかれる可能性も否定はできない。言うまでもないが服を着なければいいなどというのは論外である。

凜はテーブルの上に置かれたリモコンを手取る。

「それじゃエアコンをつけますね」

「えあこん、とな？ それはなんだ」

エアコンを知らないらしい。

「部屋の温度を調節する機械です。すぐ涼しくなりますよ」

説明しつつ、リモコンのスイッチを押した。ゆっくりとフラップが開き、吹き出し口が露出する。

ほどなくして、空気の出てくる低いくぐもった音が部屋に響き始めた。

寒い日が続いているとはいえ、部屋の中であれば肌寒いという程度で（……なのには外では雪……？）冷房を使えば部屋の温度はまだ多少は下がりそうだった。凜にとっては寒くてしようがないが、雪音のためである。本当に溶けられては堪らない。

「おお。風が来たぞ！ これは凄いなあ！ 普通の人間でもこのような術を起こしてしまうからくりとは興味深い……」
「気に入ってくれたようで良かったです」

夜中に自動で電源が切れるようにタイマーをセットする。せつかなので雪音にもエアコンの使い方を教えておくことにする。

説明を受けながらひとしきり感動した雪音は、やがて横になり、再び眠りについた。

部屋はだいぶ涼しくなっていた……いや、凜にとってはやはり寒いというのが正直なところだ。凜も暑いのは苦手だが、さすがは雪女、それ以上に暑がりらしい。

（これだけ寒いのにまだ暑いなんて雪女らしいや）

凜は再び雪音の寝顔を見る。

（とにかく、僕も寝よう。……と、その前にお風呂に入らなきゃ）

凜は部屋の電気を消すとバスルームへ向かう。

寝まきは男物のジャージしか持っていないので、風呂から上がった後も女子制服を着るしかなさそうだった。

3 / 女装遊戯

震え上がるような寒さによって、凜は眠りから覚めた。

カーテンの隙間からは微かに太陽の光が差し込んでいる。朝方——時計を見たところ六時半過ぎである。

夏の朝というには寒すぎる——いくら異常気象といえど——と部屋の状態を不穏に思った。この寒さは度が過ぎている。

女子制服を着ているせいか、特に下肢は冷えきっていた。

「うっん……」

寒さに耐えられず、凜はかけていた毛布を取り払い、身体を起こした。

立ち上がれば、冷やかな空気が全身に——スカートを履いているため空気に直に触れている下肢には一層——まとわりつき体温を奪う。やはり部屋が異常に寒い。

「どうしてだろう」と呟き、しかしすぐに答えは出た。

天井の片隅を見上げる。

昨晚から今もお稼働し続けているエアコン。

そこから吹き込まれる風が、非常に冷たい。涼しいでは済まない温度だ。

「もしかして……」

凜はエアコンのリモコンを探す。

昨晚、確かにテーブルに置いておいたはずのリモコン。それは現在、気持ちよさそうな寝顔を浮かべて畳に横になっている雪音の手の中にあった。

何故そんな所にあるのだろうと思いつつ、雪音を起こさないよう静かにリモコンを抜き取る。

リモコンの表示を確認してみると、

「お、温度低すぎるよ……」

現在の設定温度は、このエアコンで設定できる温度の限界まで下げられていた。もちろん凧がつけたときはもう少し高めの温度に設定していたはずである。

もちろん、凧が夜中に設定を変更したということはない。となれば、設定をいじったであろう人物は一人しかない。

凧は幸せそうに静かな寝息を立てている雪女を見た。

眠っているため術を使っていないのだろう。髪の色は銀に戻っていた。ちなみに、胸の膨らみも控え目以下になっている。

「ん、んうー……」

雪音が目を覚ました。

まだ眠そうな顔で、目を擦りながら身体を起こす。背中を反らし片腕を上げると「うー……」と伸びをする。そして「ふわぁ」とあくびをした。

ぼんやりとした顔で部屋を眺め、凧の姿を見つけると、

「なんだ、もう起きておったのか」

「なんだ、じゃないですつ。なんなんですか、これ！」

「なにつて……ああ、この部屋のことか？ どうだ、快適であろう！ 過ぎしやすいだろう！ 夜中、暑くてまた目が醒めてしまつてな。どうやら、えあこんが停止してしまつていたらしい。そこで、就寝中のそなたの代わりに、うちが起動してやつたというわけだ。ついでに温度も出来る限り低くしておいてやつたぞ」

はじめてのおつかいを成功させた子どものような笑顔で雪音は胸を張った。いつのまにか黒髪の人間の姿に変身しており、その胸も自信と体積に溢れている。

凧は温度を下げるボタンを連打する雪音の姿を思い浮かべて溜め息を吐きつつ、エアコンの電源を切った。

「むう。止めてしまうのか。せつかく快適だったのに」

「エアコンを使うにもお金がかかるので我慢してください」

「世の中、金か」

「それとはちよつと違いますけど……」

凜は雪音に「エアコンを使うなら温度を下げすぎないようにしてくださいね」と頼んだ。気弱な凜の性格上、注意ではなくお願いになっってしまったが。

「うむ！ 善処しよう」

善処と言われると心許ないが、一応の理解をしてくれたようなので結果的には良しである。

「ああ、もうこんな時間か」

凜が再び時計を見ると、時刻は七時になるうかという頃合いだった。

アパートから学校まではそう遠くないため授業に遅刻する問題は無いが、今日は剣道部の朝練がある。

「そろそろ出ないと……」

通学用の鞆を手にとる。

「それじゃ、学校に行ってきますから、できるだけおとなしくしていてくださいね」

ここに居座ると宣言された以上、雪女である雪音を相手に無理に追い出せる力も凜にはないし、そもそもそんな事をするつもりもない。となれば雪音には凜がいない間、問題を起こさないように気を付けてもらうしかない。

「んむ。善処するぞ。ところで、学校とは何だ？」

「えっと、勉強したり運動したりするところです」

「ひとりでか？」

「いいえ、友達もいますし、勉強は先生が教えてくれます」

「ほう……」

大雑把に理解したのか、雪音は「わかった。留守は任せろ」とだけ言っと、再び畳に横になった。その瞬間、僅かに見えた雪音の顔が、どこか思案気であったのが少々気になったが、

「あと、冷凍庫の中にコロッケがありますから、お腹が空いたらそれを食べてください。この部屋を出てすぐにある白くて大きい箱の上の段です」

凜は台所にある冷蔵庫を指さしながら説明した。

「了解した」

「それじゃ、行ってきますね」

「うむ。達者でなあ」

雪音の声に送られ、凜はアパートを出ようとする。玄関を出ようとして――

「そうだ。あれを持っていかない」と

ドアノブに手をかけた体勢から反転、踵を返す。

「どうかしたのか？」

「いえ、ちよつと忘れ物をしただけです」

部屋に戻った凜は雪音の問いに簡単に答えつつ、昨晚寝る前にとあるものを入れておいたリュックを手を取った。そして、改めてアパートを出た。

「行ってきます」

4 / 女装遊戯

凜がアパートを出た数分後のことである。

雪音は畳に横たえていた身体を起こした。

今は誰もいないので術を解き雪女の姿へ戻っている。

「やはりこの方が楽だ。凜にも早く慣れてもらいたいものなのだが……」

独りごち、雪女の姿を畏怖する凜のことを思い出す。

と、そのとき。

「うっ……」

ぐうぐうと腹が鳴った。

聞いている者がいなくて良かったと安心しつつ、

「んむ。腹が減ったな」

呟き、腰を上げる。

「それに……。今までほどではないが、それでもやや暑い」

テーブルの上に置いてあるリモコンを手を取った。

そして、電源を入れようとして、

「……やめておくか」

今朝、冷房を効かせすぎてしまったせいで、凜が迷惑していたことを思い出す。

温度を下げすぎなければエアコンを使ってもいいと言われたものの、なんとなく後ろめたい気持ちがあったのでやめておいた。雪音にもそれなりの良心と良識はある。

「よし。朝飯にしよう」

ただし、正式に許可されたことに関しては遠慮するつもりはない。雪音は台所へ向かい、凜の言っていた大きな白い箱——冷蔵庫の前に立つ。

「上の段と言っていたな」

上段が冷凍、下段が冷蔵である。

雪音は取手を掴み、扉を開いた。

心地よい冷気が漏れ、顔を包み込む。

「おお！　なんと気持ちの良い箱なのだ！　凜のやつ……こんなものがあるのなら、もっと早く教えてくれれば良いものを」

ぶつくさと言いながら冷凍室の中を漁る。

雪音は字が読めないため、昨日見たものと同じ絵柄の袋を探すことにした。

「んむ。これだな」

見事に昨日の物と同じ冷凍コロッケを探し当て取り出すと、勢いよく冷凍室の扉を閉めた。

早速袋を開け始める。

昨日と同様、粗雑な開け方だ。破り捨てた袋は、床に落としたまま放置である。

そして未解凍のコロッケにそのままかぶりついた。

「うむ……んむ……美味だ。霜や氷の粒が混ざった独特の食感がたまらぬ。氷菓のようでありながら主食としての役割も満たす。何と素晴らしい料理であろう」

誰がいるわけでもないのに、食べた感想を述べていく。

幸せそうに満面の笑みを浮かべ、雪音は次々にコロッケを口へと運んでいく。

あつという間に全て食べ終えてしまった。

「他にも……色々な袋があるのだな」

再び扉を開けると、なんとも気が早いことに昼飯のことを考え始めるが、

「よくわからぬ……。まあ、そのときの気分で決めるとしよう」
じつくり見たところで、どれがどんな食べ物かわからないのだから結局は袋の絵で決めるしかない。後でいいかと考えるのをやめる。

「それよりも、箱の下段が気になる」

雪音は視線を下げた。そこは冷蔵庫である。

冷凍室よりも冷蔵庫のほうが大きい。となれば、下の段にはもっと良いものが入っているのでは……と雪音は考えたのだ。

雪音は、わくわくしながら冷蔵庫の扉へ手をかける。

そして思い切って開いた。

「うーむー……」

冷凍室ほどではないが、涼しい空気が漂ってくる。それには満足した雪音だが、肝心の中身にはあまり興味を示していないようだ。不満げに口を尖らせている。

というのも冷蔵庫の中にはペットボトルが数本とアボカドが一つしか入っていないかったのだから当然ではあった（もちろん雪音はそれらの名称を知らない）。

試しにペットボトルを一本手に取ってみたが、雪音にとっては液体の入った軟質なビン程度の認識である。しかも開け方がわからないので飲みようがない。

「引っ張っても蓋が取れぬ。……叩き割るか」

一瞬、荒技に出ようかとも思ったが、その場合中身が飛び散ってしまうだろう。それでは飲めたものじゃない。

さすがの雪音にも常識はある。諦め、ペットボトルを床に置いた。そしてまた別のことへ考えを移す。

「この大きさなら……」

雪音はがらんとした冷蔵庫を見つめる。

にやりと顔を歪ませた。

5 / 女装遊戯

凜は学校へと向かっている。

外は相変わらずの寒さだった。昨日からずっと雪がちらついているため、今日はこれまでで一番の冷え込みになるだろうと予測できる。雪の降る勢いはまだ弱いものの、それでも路上にはうっすらと雪の層ができて始めていた。

今までは上着を羽織れば寒さを凌げていたのだが、今日はそれでも身体が震える。

七月初旬、夏の町に雪が降るというのは異常でしかない。しかしそれはそれで面白いかもしれないと凜は思い始めていた。雪女に出会って少し見方が変わったのだろうか。

「これでも雪音さんは暑いのかな。さすがに雪が降っていれば暑いなんてことはないと思うんだけど」

凜は通学路を進みつつ、昨日から住み着いた居候のことを考える。昨晩は「暑かった」と言っていた。そのせいで、最低温度まで下げた冷房によって凍えさせられることになってしまったわけだが。今日はどうだろうか。

雪が降り始めてから一日も経てば、昨晩とは比較にならないほど寒くなりそうだ。できればエアコンの使用は避けたい。もしも今日も最低温の冷房をかけられれば、さすがに耐えられない。

「いや、夜にはもうエアコンをかけても意味がないくらい寒くなっている可能性もあるか……」

凜は曇天を見上げる。

「というか、この異常気象……雪音さんが起こしていたりして……」
昨日、雪音が雪——実際には氷だった——を操る術を披露した様子を思い出す。

雪女に抱くイメージとしては、天候を冬のように変えてしまうく

らい造作もないのでは、と思ったりもする。

「うつ……さすがに寒すぎるなあ……」

昨日雪音と出会った交差点に差し掛かったところでちょうど信号待ちになり立ち止まる。

自分の身体を抱くようにして擦った。

アパートでは着替えるチャンスが無かったため、コートを着ているものの中は女子制服である。そのため足が非常に冷え、そこから全身の体温が寒さに浸食されていくような感覚がせり上がってくる。「恥ずかしいけど、もう少しの辛抱だ」

寒さは厳しいが、自分が男であると雪音に悟られないためだと言いつまみ聞かせる。

もちろん一日中この姿で過ごすつもりなど毛頭ない。

リュックの中には着替えとして男子制服を入れてある。さすがに路上で着替えるわけにはいけないので、人目に付かない場所——ここから最も近いのは公園のトイレ——にいたらさっさと着替えるつもりだ。

信号が青になった。凜は交差点を渡る。

渡り終えたところで、

「あら……」

神谷魅魚と遭遇した。もとい、してしまった。

「まあ……うふふ」

魅魚は、凜の格好に気づくなりその姿をまじまじと見つめて観察を開始した。

長い丈のコートを着ていても、スカートから伸びた凜の素足は丸見えだ。女子制服を着て登校しているのは、誰の目にも明らかだった。

（うつ……この時間ならそれほど人には会わないと思ったのに……）
よりもよって最悪の相手に遭遇してしまった。

これから女装生活をするはめになりそうなので魅魚に助けを請おうとは思っていたが、まさに現在進行形で女装している今このタイミングで会いたくはなかった。

なんとか誤魔化そうと適当な話題を振ってみる。

「や、やあ。おはよう。魅魚って、いつもこんなに朝早いのか？」

「とうとう目覚めてしまったのね。ふふ」

魅魚は悪魔の微笑を浮かべ、独り言のように呟いた。凜の問いかけなどまるで始めから無かったかのように会話は成立していない。させる気もなさそうだ。

そして、なぜかぺこりと軽くお辞儀をして魅魚は先へ行ってしまう。

「ちょ、ちょっと待って！」

確かに会いたくはなかった。しかし会ってしまった以上、去られるのは非常に困る。

間違いなく誤解されている。なんとかそれを解こうと魅魚を追いかけて横に立ち、並んで歩くことに成功する。

「あら。一緒に登校したいのかしら。いいわよ。あなたは大事なオトコノコの友達だから」

妙な強調をしながら言い、静かに笑う。

細めた目は一見虚ろに見えるがその奥底では妖しく光っており、凜には魅魚が本物の悪魔に見えた。

「これは誤解なんだ。これには、その、事情があつて……」

なんとか説明しようとするが困惑してしまつて上手くできない。

そのうえ口に関しては魅魚の方が達者なため、何を言っても軽くいなされてしまう。

まずは落ち着かなければ話にならない。

凜は冷静さを取り戻すことに専念しようとする。

と、そのとき目的のものを発見した。いつの間にか公園の近くまでたどり着いていた。まずは公衆トイレで着替えるのが先決だ。

「ちょっと待ってて、絶対に待ってて！」

凜は両手を前に出し、ストップのジェスチャーをしてみせた後、公園へと駆けていく。

「……おもしろい子」

魅魚は凜に言われた通り、公園の入り口で立ち止まる。

6 / 女装遊戯

凜は公園のトイレへ一目散に駆けこんだ。男子トイレだ。個室へ入り鍵をかけるとリュックから自分の制服——男子制服を取り出した。

急いでコートと女子制服を脱ぎ、男子制服の袖へ手を通す。肌をさらせば寒さに震えたが今はそんなことを気にしてられない。ワイシャツのボタンを留めるのに時間を食ったが上着は学ランだ。とりあえず羽織って後で歩きながら留めればいい。ズボンを履き、女子制服一式はリュックへしまう。焦っているながらも、きちんと折り畳むあたりが凜らしい。最後にコートを羽織って、変身完了だ。

軽く呼吸を乱しつつ、着替えを終えた凜は魅魚のもとへ駆け寄った。

魅魚はちゃんと公園の入り口で待っていた。外に待たせていたため、肩や頭には雪がうつすら積もっている。

ほっと胸を撫で下ろす半面、雪の中待たせてしまったことを悪いと思いつつ、立ち止まった凜は膝に手について息を整える。

「ごめん、待たせちゃって」

「あら、普通の男の子に戻ってしまったのね。残念だね」

普段あまり感情を表にしない魅魚が珍しく哀しそうな顔をする。とはいえ芝居がかったそれが凜をからかうためのものなのは明らかだが。

「さつきも言ったけど誤解なんだよ。好きで女の子の制服を着ていたわけじゃないんだ」

「へえ。そう。とりあえず……立ち話もなんだから歩きながらにしましょう。それに朝練だってあるんでしょう」

「あ、そうだ……朝練があるんだった。うん、行こう」

二人は、雪の降る道を歩き出した。

男子制服に着替えたので、もう突きつけられる視線にうろたえる必要もない。

今度は落ち着いて、順序立てて説明しようと試みる。

「実は、その……昨日、具合を悪くした人を見かけて……。その人を助けたんだ」

さすがに腹ぺこの雪女が……とも言えないので漠然とした言い方でごまかす。それでも嘘はつかないところは凧の性格ゆえだろう。
「それで、その人を僕のアパートで介抱して——今もまだアパートにいるんだけど——その人、大の男嫌いなんだ。そのとき僕は女の子の格好をしていたから、その人は僕のことを女だと思っているんだけど……」

「本当は男だと言いだせなくて困っているのね」

状況を察したのか、魅魚が言葉を引き継いだ。

「その人、女の人よね。わざわざ男嫌いっていうのだから」

「うん」凧は肯定する。

「若い人？」

「見た目は、僕より上だと思う……二十歳くらいに見えるかな」

五十年程前にも人里へ来たなどと言っていたからには生きている年数はもつと長いのだろうが、見かけ上何歳に見えるか、で答えることにした。

「……そう」凧の返事に、魅魚は一瞬眉根を寄せた。

そして数秒の沈黙を置いて、話し始める。

「あなた……。人を助けるのはいいけれど、その方法が自宅に連れ込む……というのは、どうなのかしら」

片目だけ細めて凧を見た。芝居がかってはいるものの、まるで変態や犯罪者を見るかのような訝しげな眼差しだ。

「救急車を呼んだり、病院へ連れて行くのが普通だと思うのだけど、自宅に連れ込むなんて、あわよくば……なんてことを考えていそう

な人間の行動ね。まるで幸太郎のようよ」

貫いてくる視線は、周囲の気温よりも冷たい。

相手の衰弱の原因が空腹だったため、食事を与えるのが一番の対処法かと思つて自宅へ連れて行つたのだが、そのことを曖昧にただ「助けた」としか説明しなかったのが仇となつた。

しかし、腹をすかせた女性が助けを求めてきたというのも間抜けな話である。

「ち、違つてば！ その……病院へ連れていくほどじゃなかったから、僕のとこへ呼んだだけで……」

結局、慌てふためきながら弁解することになつてしまつた凜を魅魚はいつも通りの邪気のある笑顔で眺めていた。

「ふふつ——ジョークよ。幸太郎ならともかく、あなたにそんなことをする勇氣はないわ。といつても、そんな勇氣はいらないけれど」からかわれていただけのようで安心した。

もともと魅魚は必要以上の詮索はしないタイプだ。凜の状況が把握できればそれでいいのだろう。逆を言えば、魅魚の方から積極的に何か尋ねてきた場合、彼女は何かを企んでいるということでもある。

いつのまにか校門までたどりついていた。

二人は校舎へ入り、上履きに履き替える。

「その女の人、まだいるのよね。あなたのアパートに」

魅魚が下駄箱に靴を入れつつ尋ねた。魅魚の靴箱はやや高い位置にあるため、小柄な彼女は背伸びをして靴をしまう。

「うん。まだ当分の間いることになるかもしれない」

「そう。つまり、あなたはその間少なくとも自宅では女の子でいなければならぬのね」

魅魚は上履きに足を通すと、つま先で軽く地面を叩いた。

そして微笑。

それは魅魚が、凜にとってよからぬことを目論んでいるときの悪魔の笑みである。

7 / 女装遊戯

剣道部の朝練も、午前の授業もつつがなく終了し、昼休みになった。

今後、凜は学校での男としての生活と、自宅での女としての生活の、言わば二重生活をしなければならない。そのことを考えると気が滅入る凜ではあったが、できるだけ普段通りにふるまっていた。いつも以上に寒いからだろうか。今日は教室で昼食をとっている生徒が多かった。凜も幸太郎と二人、教室で昼食をとっている。購買でパンを買ってきたのだ。

そのうち魅魚も来るだろう。彼女は別のクラスの友達グループと一緒に昼食をとっているらしいのだが、教室に戻ってくるのはわりと早い。

唐突に、

「凜よ。オレはそろそろこの高校に、新しいランチスタイルを提唱しようと考えている」

凜と向かい合うように前の席に腰掛けていた幸太郎が、重大発表をするような重々しい口調で言った。

「現在！ 我が霞西高校でとられているランチスタイルにはどんなものがある！」

勢いよく立ち上がり、幸太郎は風を切るように右手を振った。

その勇猛な熱のこもった弁舌にたじろぎつつ凜は考える。

「ええと……購買、学食、あとはお弁当……くらいかな？ 学校の外には出られないし」

「その通りだ凜。では、メニューにはどんなものがある」

問いつつ、幸太郎は左手に持った焼きそばパンを一口食べた。

「うーん。購買にはパンくらいかなあ。学食には麺とか定食もあるけど。持参のお弁当は人によるし……」

幸太郎の問いに答えつつ何の意図があるのか凜は考える。幸太郎のことだからくだらない結果にしかならないとは思うのだが、さっぱりわからない。

しかし考える必要は無いと言わんばかりに幸太郎はあっさりと提唱した。

「そう！ この学校の昼食は普通すぎるのだ！ この感受性豊かな思春期の我ら学生に、普通の昼食など健やかなる成長の抑制にしかならん！ ああ平凡！ ああ退屈！ いいか……必要なものは虚をつく意外性だ！」

よくわからない主張を展開しつつ、幸太郎は再び焼きそばパンにかぶりついた。さつきより動作が荒々しい。

「ずっとオレは考えていた。どうすればこの平穩かつ平凡な現状を打開できるのか。考えに考え……やっと、ある結論に辿り着いた。

そのときオレは感じたよ。背筋に雷が落ちた！ ああ！ なぜ今まで気が付かなかったのだろうか！ ヒントは至るところに堂々と提示されていたのに！ しかしそれに気がついたとき、全身を力タルシスが駆け巡った！」

「そんなにすごい考えが……？ それっていったい……」

幸太郎の熱意と真剣さに凜も考えを改め、構え直す。

ふふん、と一拍おいて幸太郎は言った。

「キーワードは、女体研究と女子高生の昼下がりだ」

「え」

真面目な話なのかと思いきや、出てきたワードに凜の期待は瓦解する。

「結論！ オレは提唱する！ それは……ずばり！ 昼食女体盛り法案だ！」

凜は心の中で、またか……と溜め息をついた。

それを代弁するかのように「また幸太郎がなんかほざいているわよ！」「変態すぎるわ……」「あいつと同じ空気を吸っているなんて嫌あ……！」「淫獣もあそこまでいくと天然記念物ね」「やつぱ

り死ねばいいのに」と教室にいる生徒が多いぶん、いつも以上の非難の声が聞こえてくる。

(……僕、なんで幸太郎と友達なんだろう……)

そんな凜や周囲の人間たちの反応には脇目も振らず、幸太郎は校則の壁さえ跳び越えた法案の内容について説明を始める。

「この法案はその名の通り、昼食を女体盛りにするというものだ！
こうすることにより男子生徒の健やかなる成長はぐんぐんと促進
され……おっと、誰か来たようだ」

幸太郎が饒舌だった語りを止めた。その視線の先には教室へと戻
ってきた魅魚の姿があった。

「よし、論より証拠、百聞は一見に如かずだ。オレが実例を見せて
やる」

幸太郎は自分の鞆を取り出し、中を漁りだした。

その間にもアボカドジュースのパックを吸いながら魅魚が向かっ
てくる。

「また幸太郎が馬鹿をしているのね」

挨拶代わりにそう言うと、空いている凜の隣の席へ腰掛けた。

「今日の剣道部、放課後の練習は休みだそうよ。掲示板に書いてあ
ったわ」

戻ってくる途中に見てきてくれたのだろう。なんだかんだで気の
利く一面も持っている。

とその時、鞆から何やら取り出した幸太郎が魅魚に語りかけた。

「おう神谷。よく来たな、待っていたぞ！」

「あなたのためじゃないわ」

冷やかな声で魅魚は言い捨てる。

しかし、幸太郎もそれには慣れているようで、めげずに話を続け
る。

「そう高慢かつ冷淡な態度をとるな。今日はな、神谷にプレゼント
を用意してきたんだ」

ふふん、と意味深な笑みを浮かべつつ幸太郎が差し出した手には、

コッペパンがあつた。

「……………」

魅魚はアボカドジュースを吸いながら、無言でただそれを眺めている。

それが何なのかと尋ねないあたり、よっぽど興味がないのだろう。しかしそれさえ想定通りとも言つように、幸太郎は勝手に解説を始める。

「これはな、神谷のためにオレがわざわざ早起きして作った特製アボカドパンだ！」

ぐいとパンを持った手を突き出す。魅魚の好物で釣る作戦のようだ。よく見るとそのコッペパンにはスライスしたアボカドが挟んであつた。

「さあ！」

突き出した手をさらに前方へと差し出す。

「さあ！ さあ！ さあ！」

魅魚の顔の前でアボカドパンを静止させた。食べる、という意味だろう。

「うふふ。ありがとう」

妖しくほほ笑むと、魅魚はパンを受け取る――

「んぐおっ！」

と見せかけて、幸太郎の口へ押し込んだ。幸太郎は口を押さえて、打ち上げられた魚のように床を跳ねまわった。

「馬鹿ね。そのアボカド、全然熟していないわ。買ってすぐに使ったんでしょけど、それだと固いし苦味があるし、美味しくないのよ。日本のお店で売っているアボカドは店頭では完熟していないから何日か放置した方がいいの。バナナみたいにね」

まさかスライスして挟まれたアボカドを見ただけで、熟している度合いがわかるとは……と、凜は魅魚のアボカド好きを恐ろしく思った。

「うんぐあっ！ ぐおお！ んぬうい！」

アボカドパンを口に含まされた幸太郎は、もがき苦しんでいた。しかしアボカドの固さや苦味が原因にしては大げさだ。

全てを飲み込んだ――飲み込んでしまった幸太郎が、目を血走らせ必死の形相で叫ぶ。

「ぐはあっ！ こ、このパンには『神谷を眠らせ、その隙に女体盛りの舟にしようしまう大作戦』を実行するための促進剤と睡眠薬が仕込んであったのに……！」

（……睡眠薬はともかく促進剤って、いったい何の……）

「説明お疲れ様」

魅魚の言葉を合図にするかのように幸太郎は痙攣したまま教室の床に倒れこんだ。

同時に昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴る。まるで試合終了のゴングのように。

ビクビクと全身を脈打たせているのだが大丈夫だろうか……。被害者が幸太郎でなければ大事件である。

教室からは魅魚を称え、幸太郎を罵倒するざわめきが溢れ出していた。「これで静かになったわ！」「おめでとう魅魚ちゃん！」「やつと死んだのね！」「拍手喝采だった。

凜は幸太郎に近寄る。

「変なこと企むから……」

二人のいつものやり取りにも慣れきっており比較的冷静な凜は、うつぶせの幸太郎を仰向けにしてやった。うつぶせのままというのは死体のようで不気味だったからだ。

保健室へ連れて行くかとも思ったが完全に眠っていて（死んでない……よね？）連れて行きようがないため、諦めて様子を見るに留める。幸太郎なら大丈夫だろう。

魅魚はいつも通りの微笑を湛えながら幸太郎の状態を分析する。

「こんなに即効性の強い睡眠薬だなんて、どこで手に入れたのかしら。それとも一緒に入れたという促進剤が変な化学反応でも起こしたのかしら」

もう痙攣は治まり表情も見限りでは安らかだ。安らかな眠りについてしまったとしたらそれはそれで問題だが、さすがにそれはないだろう。

「ところで、あなた、放課後は時間あるわよね」

幸太郎には興味がなくなつたかのような顔で、魅魚は凜の方を見た。

「うん。剣道部が休みになつたんなら、特に用事はないよ」

魅魚が席を立つ。

「そう。それじゃ、放課後は買い物にいきましょ。あなたのお洋服を買いに」

妖しく目を光らせ、にやりと笑つた。

8 / 女装遊戯

放課後。雪の積もった路上を歩く凧と魅魚。

自宅への帰路ではなくデパートへと向かう道のりである。

ことの経緯は「あなた、女装生活をするのはいいけれど部屋着はどうするつもり？　ずっと制服でいるわけにはいかないでしょう」と魅魚に指摘されたことに起因する。

男嫌いな雪音と生活をとにもする以上、女装生活はさけられないが、そのための衣服が女子制服のみというのはさすがに無茶だ。

魅魚の趣味が『凧を女装させること』であるため、彼女の所持品の中には凧専用の洋服というものがあるにはあるのだが……。どうやら魅魚はこれを機に凧をあらぬ方向へと導いてしまいたいらしい。あえてその洋服を与えず、凧自身に買わせようと目論んでいるようだ。

デパートで女性用の服を買う。それが目的だ。

「ついでに買った……」

思わず、そんな言葉が漏れた。

現在『春日デパート』の入口前である。

このデパートは、凧の住む霞町で唯一の大きな建造物として有名である。それだけ客入りも多く、連日賑わっている。七階建てという規模を誇るこのデパートの周囲にはこれほど大きな建物は他にないため、少々存在が浮いてはいるが。

春日デパートのてっぺんを見上げる凧だが、仕草はもじもじしていて非常に情けない。

なぜ女々しい態度をとっているかといえば、ここへ来る途中、公園に寄って女子制服に着替えてきたためである。凧は今、女装をしているのだ。

購入する洋服のサイズの都合上「魅魚の服を買いに来たその付き

添い」という設定は通用しない。自分のものとして買うためには、やはり自分が女性として来店する必要がある。そういった理由で女装をしてきたのだが、もつと他に良い方法はなかっただろうか？ 今になって凜は後悔していた。

周囲の人間に自分が男だと気付かれていないか……非常に心配であり恥ずかしくもある。

「堂々としていないとかえって疑われるわ。どこからどう見ても女の子だから安心なさい。ヒゲもまったく生えていないし、喉仏も目立たないし、完璧な女の子よ」

凜の情けない態度に魅魚が忠告を入れる。

しかしそうは言われてもスカートを履く感覚は簡単に慣れられるものでもない。膝を隠せる程度の長さがあるので、ミニスカートのような恥ずかしさこそ無いが、それでも風が吹けば妙な感じがする。やはり他の購入方法を検討したいと凜は思う。

「どうせ試着するときには着替えることになるのだから同じよ。諦めなさい」

凜の胸中を見透かしたように、魅魚が喝を入れた。

「それとも、そうね。人目につきたくないのなら……非常階段を使って屋上から中に入る？」

魅魚が提案するように、

「このデパート、外付けの非常階段を使えば、屋上でも好きな階でも、人目につかずに入れるのよ。とくに屋上は、一般客に開放されていない未知の空間だから、おすすめ。屋上の入口は施錠されているけれど、近くのフェンスをよじ登れば簡単に侵入できるわ。非常階段のことを知っている人自体少ないから他に人がいることも滅多にないし、こっそり屋上に忍び込んで……」

「なんだか目的が変わっているような……」

魅魚の顔によからぬ悪戯を考えているような微笑が浮かび、凜は慌てて話の方向を修正する。

「早く買って、早く帰ろう！」

「あら、行く気満々なのね。早く買いたいだなんて」

「僕の希望はそっちじゃなくて帰る方……」

「さ、行きましょ」

からかわれ、赤面しながらも春日デパートへと入っていく。

9 / 女装遊戯

通常通りに入店し、婦人服売り場である三階で二人はエスカレーターを降りた。

婦人服専門店ではなく一般的なデパートなのが救いだ。凜の緊張も幾分やわらぐ。仮にここが専門店であれば、場違いなところにいるという凜の緊張、不安、羞恥は容易に臨界点を突破してしまっていたことだろう。

白を基調とした明るいフロアに婦人服が並び、所々に派手な服や装飾をさせたマネキンが立っている。

外観そのものは置いている商品が違うだけで男性の売り場と大して変わりはない。

とある区画を除いて。

「あ、あう……」

凜はそこから目を逸らすが、魅魚にはあっさりと感づかれてしまう。

「あら、あとでそれも買うのよ。楽しみね」

問題の区画——下着売り場を一瞥して微笑した。赤面してしまう凜に構わず魅魚は歩を進めていく。

彼女の小さな背中を追いながら、

「そんな……さすがにそこまでしなくても」

見られるわけではないのだからいいじゃないかと言おうとして、しかし魅魚に遮られた。

「甘いわ。相手は女の人でしょ。男を騙すのとはわけが違うの。ぼろが出れば一発でバレるわよ。完璧に女装したとしても心細いくらいだわ」

若者向けの洋服が置かれた区画で魅魚は立ち止まり、商品を目利きしていく。同時に凜との会話もこなす。

「最近はずいぶん寒い日が続いていてよかったわね。夏用の薄手の服だと線が浮いたり透けたりしちゃうでしょ。でも今の気温だったら厚着でもおかしくないわ」

魅魚はハンガーに掛けられた服を一着ずつ両手に取り、それらと凧とを交互に眺めた。

季節は夏だが、ここ数週間は寒い日が続いているため、数は少ないものの秋冬物の服も置いてあった。魅魚の手にあるのもそれである。

「せ、線……」

ぼそりと呟いた凧に、魅魚が感情の読み取りにくい視線を注ぐ。

「あら。あなたでも幸太郎みたいな妄想をするのかしら。それとも正に今、しているのかしら。いけない子ね。ふふふ」

魅魚はわざと背中を見せるように後ろを向いた。薄手のスクールカーディガンを着ているので何か見えることはないのだが、それでも少しドキッとしてしまった。

さらに妖笑され、相對している凧の全身からは冷汗が噴き出してきた。

「ぜ、ぜんぜん。そんなことないよ……」

「ウソね」

さっと流し、魅魚は服を手にとって戻し、次を取ってはまた戻すという作業を繰り返している。

凧に似合うかどうか品定めをしているようだ。凧の女装する目的がなんであろうと、魅魚の目的である『凧を女装させる』に趣旨が合致するため、服選びそのものは真剣である。

そしてようやく、魅魚の厳しい選考をくぐり抜けた一着が凧の身体にあてがわれる。

「……………」

「ど、どう……かな？」

服が似合っているかどうか。魅魚は無言で吟味しているため、良し悪しを凧の方から問いかけてしまった。

魅魚は未だ無言。

そして、十数秒の沈黙が過ぎたところで。

「ダメね。印象が明るすぎるわ」

服を元の場所に戻し、再び選別を始めた。

真剣なその姿にやはり魅魚も女の子なんだなと凜は改めて思う。

態度や表情からは感情を推測しにくい、なんだかんだで楽しんでるように見えた。

「これはどうかしら」

再び服をあてがった。

そして、沈黙。

凜に似合うかどうかを吟味しているだけなのだろうが、じっと眺められるとどうも落ち着かない。魅魚の視線というのは、相手の心の中まで見透かしてしまうような鋭さと力強さがあるからだ。

「まあまあね。それじゃ着てみて」

魅魚は凜に洋服を手渡すと、試着室の前へと先に向かった。そして凜の方へと振り返る。

「さあ。来なさい。そして着なさい」

そのときカーテンの前に立った魅魚が浮かべた表情は悪魔か女王様が、どちらかだろう。

凜は顔を真っ赤にしながら近寄っていく。

「き、着るのっ？ 着なきゃだめっ？」

周囲を確認しながら小声で問う。

ざっと見た限り近くに客や店員はいないようだが、だからといって、おいそれと着替えられるほど凜の精神はタフではない。

「買う前に試着するのは当然でしょ」

魅魚はいつもの調子だ。

「それはそうだろうけど……」

「今、あなたは女の子よ」

渋る凜のスカートを、魅魚がぐいぐいと引っ張った。

「ちょ、ちよつとやめてっ」

慌ててスカートを手で抑えた。凜の顔は赤を通り越して真紅に染まっている。

「早くしなさい。他にも何着か買うのだから」

「う……うう……。わかったよ……」

凜は観念して、試着室の中へと入っていった。

10 / 女装遊戯

落ち着いた雰囲気です。統一した洋服を計三着、丈の長めのスカート二枚、そして……なぜか女性用下着を二組。

以上が今回の買い物で購入した品である。

代金はすべて魅魚が持ってくれた——曰く自分の趣味の延長なので代金は自分が持つ——のだが、そのかわり所有権も魅魚にある。

今は魅魚が凛に一時的に貸しているという状態らしい。凛自身に女装の趣味があるわけではないため所有権など必要ないが。

アパートに帰る前に魅魚の家に寄り、今まで凛が女装するときに着ていた服も数着借りた。買い物という試練を乗り越えたご褒美だそう。

デパートへ行く前は「服は貸さない」と言っていた魅魚だが、それは買い物に行く必要性を主張するための方便であり、目的が果たされた今ならもう構わないらしい。

リュックの中身は一杯になっていた。実際の重量以上に重たく感じつつ（これは心労による重みかなあ……）凛はアパートのドアを開ける。

「だいぶ遅くなっちゃった」

服を借りるために魅魚の家に寄った時間はそれほどでもなかったが、デパートで過ごした時間が長すぎた。魅魚は凛が予想していた以上に真剣に服を選んでいたので、かなりの時間を要したのだ。

時刻はすでに夜の九時を回っていた。

中に入り、ドアを閉め、靴を脱ぐと部屋へと向かう。

「雪音さん……。あれ？」

電気はつけっ放し。部屋の戸も開けっ放しだった。

しかし部屋には誰もいない。

いつも自分が帰ってくるときと同じ光景。テーブルやタンス、本

棚など必要な家具があるだけの殺風景な部屋が待ち構えているだけだ。

「どこか行つたのかな……？」

なんとなく居そうな気がしてテーブルの下やカーテンの裏などを見てみるが、やはり雪音の姿はない。

雪音がいらないことを不思議に思いつながらも、凜は荷物を置き、リュックの中に詰めた女性物の衣類を取り出した。これらは雪音がいないうちにしまっておいた方が都合が良い。とりあえずタンスの空いている段の中へと入れておく。

「……雪音さん、どこに行つたんだろう」

タンスを閉めながら、凜はおもむろに呟いた。

雪音が理由もなく出ていくとは思えなかった。彼女には食料を手に入れる術がないからだ。

男性の精気を吸って食料代わりにするのが通常の雪女の行動らしいが、雪音はそれをしない。かといって、飲食店やスーパーなどに入って強引に食品を奪うなどということもしないだろう。となれば食料が確保できるのは凜のアパートだけなのだ。

「散歩にでも出かけたのかな……？」

ちよつと外が気になつて外出したという可能性ならあり得る。彼女は部屋が暑いと言つていたから、まだ雪の降っている外へ身体を冷ましに行つたのだとしてもおかしくはない。

とは言え、やはり心配だ。

雪女と自称するだけあつて不思議な術を使えるようなので、夜道で変質者と遭遇したとしても何とかなりそうだが……そう言った理屈を抜きにして、雪音のことが心配だった。

「やっぱり探しに行つた方がいいかな」

このアパートの周辺をまわってみよう、と凜は立ち上がる。

（……そうだ、懐中電灯を……）

夜道は暗い。街灯があるにはあるが、手持ちの明りがあるのに越したことはない。

凜は冷蔵庫の上に懐中電灯が置いてあることを思い出し、台所へ行く。

「あれ……？」

凜のアパートの間取りは、玄関を入って右手がユニットバス、隣の個室にはトイレがあり、左手には台所、正面に向かえば八畳の部屋が一室となっている。最初部屋に入ったとき、台所は素通りしてしまったので気付かなかったのだが――

「いったい何が……？」

冷蔵庫の前は大変なことになっていた。

何者かに荒らされたようにペットボトルが散乱し、さらに冷蔵庫内を仕切るための中板まで放り出されている。魅魚専用のアボカドも同様の有様だった。

空き巣でも入ったかのようなだが、それにしては荒らされているのは冷蔵庫だけだ。空き巣が狙うとしたらタンスや、もっと別の場所だろう。

それに冷蔵庫の扉は閉められている。中をこれだけ荒らしておいて、扉だけ律義に閉めていくというのも妙だ。

「どうしてこんなことに……？」

凜は冷蔵庫の扉に手をかけた。

そして、恐る恐る扉を開く。

普段なら気にならない程度の大きさでしかないはずの、ギィ……という音が不安を駆り立てる。

そして、中には。

「う、うわああああ――！」

中には死体が入っていた。

密室のアパートで殺人事件が――？

思わず凜は叫び声をあげてしまったが、

「あ」

――いや、死体ではない。見間違いだ。
が、凜がそう思ったのも無理はない。

「……んう？」

冷蔵庫の中に、雪音が居た。

膝を抱えるように丸く座って、ぴったりと冷蔵室内に収まっていた。

白の和服を着、そのうえ真っ白な肌の人間が冷蔵庫の中に入っていれば驚くのが普通だろう。自分が殺人事件の第一発見者になってしまったと誤解してもおかしくはない。

「なあんだ、凜か……ふああ」

さっきまで寝ていたのか、目を細めながら凜を見上げる。眠そうな目を擦りつつ、

「やっと帰ったか。うちは待ちくたびれて眠ってしまったぞ」

雪音は一瞬目を閉じた。すうつと髪の色が銀から黒へと変わり、目を開いたときには瞳も茶色に変わっていた。同時に胸元に谷間が生まれる。雪音が言うところの一般的な人間の姿だ。

「よい……しよつ。あつ、と——」

立ち上がろうとするが、狭いところから動こうとしたためにバランスを崩した。何かに掴まるうにも、何もなし。

雪音はそのまま前のめりに崩れていつて——

「ゆ、雪音さん、大丈夫でぐわあっ！」

凜を押し倒す格好で冷蔵庫から脱出した。

人間モードの雪音にしかないたわわな胸が和服越しに凜の顔面に押し付けられている。とても柔らかく心地よい。しかし呼吸ができない——。

「んむう……す、すまぬ。うちとしたことが」

詫びつつ立ち上がり、凜に手を差し出す。

「どうしたのだ。掴まれ」

「は、はい……」

赤面しつつ雪音の手を取り、立ち上がる。

凜は自分の顔が沸騰する音を初めて聞いた気がした。

11 / 女装遊戯

雪音の言によると、今朝、凜が学校へ出かけたあと何気なく冷蔵庫を開けた雪音は「涼しそうだから」という至極単純な理由でそこに入ったらしい。中にあったものは邪魔だったので外に出したのだそうだ。

凜は散乱した中板やペットボトルを元の場所へと戻した。アボカド以外の食材がなかったことを不幸中の幸いと思うと同時に、そういえば今日もまた買出しを忘れていたということに気がつく。

「デパートに行ったとき、ついでに買っておけばよかったなあ。すっかり忘れてた」

婦人服売り場の件で頭がいっぱいでそこまで気が回らなかった。

失敗したなあなどと呟きつつ、凜は部屋へと戻った。

「――あれ。今日はエアコンつけてないんですね」

部屋ではすでに雪音がくつろいでいた。

「ぼーっとテレビを見ている。最初こそは「箱の中に人間がいるぞ!」と驚いていたが「あなたもさっきまで箱の中にいたじゃないですか。しかもぐっすり眠っていたでしょう」と言つと「確かに。ならば普通のことだな」と納得してしまった。もちろん、本当に箱の中に人がいるわけではないということは後から説明した。

凜の問いかけに、雪音はテレビを眺めたままこたえる。

「昨晚と違って良い気温だからなあ。これなら、えあこんの助けを請う必要もないであろう」

テレビが気に入っただのかもしれない。ちなみに見ている番組は恋愛ドラマで、惹かれ合う男女が互いを抱きしめるというシーンだった。

「そうですね。よかったです」

今夜は凍えなくても済みそうだと安心しつつ、凜は適当なところ

に腰を下ろした。

せつかなので一緒にテレビを見ることにした。といつてもこのドラマは見たことがなくストーリーもわからないため、途中から見ても面白いかどうかは疑問だが。

雪音も途中からのはずだが面白いのだろうか。

「今、どんな展開なんですか？」

見ているところに声をかけるのも悪いかと思ったが、話の流れがわからないと見てもさほど面白くないので尋ねてみることにしたのだが、

「ん。わからん」

残念ながら答えは得られなかった。

「うちはこの映像とやらの興味を惹かれたから見ておるだけだ。芝居の内容には興味ない。それに……男に惚れるなど、人間の女も随分と物好きなのだな」

凜の方を向いたかと思うと忌々しげな表情を見せた。

雪音の男嫌いは筋金入りだ。今、自分は『女』だから助かっているということを凜は再認識し、気をつけなければ……と気を引き締めた。

と、雪音が背を反らし、伸びをした。そして大切なことを思い出したかのようにな、

「おお、そうだ。風呂を貸してはくれぬか。山におった頃は湖で身を清めていたのだが、人里に下りてきてからは、そんなものも無くてな。もう人里へ下りて何日か経つ。綺麗好きのうちとしては、さすがにもう我慢の限界なのだ」

そう言つて立ち上がりきよろきよろと首を動かす。

凜も腰を上げた。

「いいですよ。場所はこつちです。玄関の近くの……」

歩いて行き、

「ここがお風呂です」

扉を開けて中を見せた。二畳分のスペースのユニットバスである。

「脱衣所はないので服はこの棚にでも置いてください。ちょっと湯気で湿っちゃうかもしれませんが」

凜は風呂場の壁の上方に取り付けられた棚を指さす。ちなみにバスタオルなどもそこに置いてある。

「湯気の心配ならいらぬ。うちは湯を使わぬからな」

たしかに熱さの苦手な雪音が、わざわざ熱い湯を使う理由もない。「えっと、あとは……」

最後にシャワーの使い方を教えておく。水の出し方、シャワーとカランの切り替え方など必要そうな操作を一通り教える。雪音はシャワーを見るのは初めてだったようで感心しながらも、使い方はすぐに覚えたようだ。

「準備万端。では早速使わせてもらうぞ。ふむ……そうだ。そなたも一緒に入るか？」

「なッ——！」

その言葉に一瞬、時が止まった。

「い、いえ！　ぼ……じゃなくて、わ、私はあとで入りますから！　危うく僕と言ってしまうところだったのを堪えて申し出を断る。

自分のことを僕と呼称する女子もいなくはないが、できるだけ疑われる因子は排除した方が無難だ。

「そうか」

雪音は不満そうな顔で、

「うむ。まあ、よく考えてみれば、二人で入るにはちと狭いな。くつつけば入れなくもなさそうだが……まあ無理に一緒に入る必要もない」

「くつつく……！　だ、ただだ、だめです！　——それじゃ、わ、私は夕飯の用意しておきますから！　ごゆっくり！」

凜は逃げるようにその場を後にした。

12 / 女装遊戯

雪音が風呂に入っているうちに、遅くなってしまったが夕飯を作っておこうと凜は台所に立った。

冷凍室を開けて中身を確認する。冷凍コロッケがあればそれを出そうかと思っていたが、どうやら品切れらしい。あるのは鳥のから揚げとピザ——どちらも冷凍食品である——くらいだった。

雪音は解凍していいない冷凍食品ならなんでも好んで食べそうだが。そう考えて、食べやすそうなかから揚げを選ぶ。自分のぶんも同様から揚げにすることにした。もちろん自分の物に関してはレンジで解凍するが。

「明日こそはちゃんと買つてこよう……」

凜は独り言つ。

と、そのとき風呂場から綺麗な歌声が聞こえてきた。

雪音が何か歌っているのだろう。

聞いたことのない唄だが、扉越しに聞こえてくる雪音の澄んだ歌声が耳に心地よい。

当然のごとく単音でしかないはずのその声音は、風呂場の反響も手伝ってか、非常に耳当たりのよい優しい和音のように聞こえた。

なんだか心がふわりと包まれ浮遊するようやさすらぎを感じる音色だった。まるで聴く者の心を丸ごとさらっていつてしまいそうな不思議な旋律が凜の心音に重なっていく。

（そうか。ただの推測にすぎないけど——）

凜は思った。雪音が以前に出会い、彼女に名を付けたという男。その男が『雪音』と名づけたのは、この歌声を聞いたからではないだろうか。

そう、これは雪の音だ。

静かな夜に降る雪の音。聞こえるはずのない神秘の韻。それが雪音の歌声となつて耳元に届けられるのだ。

何かに吸い寄せられるように、凜はそちらへ近寄る。

耳を傾けて——シャワーの音が聞こえてきた。

雪音の歌声に、不規則な水飛沫の音が重なる。

壁越しに届くその不調和な旋律は、凜にとつて初めてのもので、先程とはまた違った意味で妙に心臓の鼓動を高鳴らせる。

不意に。

いつも自分が使っている浴室で白雪の美女が水を浴びている姿を想像してしまう。

艶やかな黒髪——それとも銀だろうか——が流水に濡れ、きめ細やかな白い肌に張り付き、そして、なだらかな素肌を冷水が伝つていく……。

「い……いけない、いけない！ 何を考えているんだ僕は！」

我にかえつて邪念を振り払った。

雪音が来てからというもの、自分はどうも落ち着きがない。学校では魅魚に翻弄され、自宅では雪音に——悪意がないとはいえ——振り回される。まだ雪音と暮らすようになって二日目だというのにこの有様では先が思いやられる。

「でも……」

こんな生活も嫌ではなかった。

凜は一人暮らしというものが寂しくて仕方なかった。

小学生の頃に両親を亡くし、中学卒業までは親戚の家で面倒を見てもらっていた。ありがたいことに叔父も叔母もよくしてくれたが、どうしても自分は迷惑をかけてしまっているのではないかという気持ち拭えず、むしろ自分の方から独りになろうとさえしていた。

そして高校に入るのをきっかけに、一人暮らしを始めた。

学校では幸太郎や魅魚のような仲の良い友達もできたが、それでも自宅に帰ってくると、不意に独りの寂しさが襲ってくる夜が何度

もあつた。

人間とは孤独な生き物だ。そうであるからこそ心の支えとして他者を求める。しかし、それは友人という存在では担いきることのできない役割であるし、凜自身それを友に担わせようなどとは思ってもない。故に、凜は孤独だった。

それを考えるとこの『自分を待っていてくれる人がいる』という安心感がどんなに素晴らしいことか。

雪音が自分にとってどんな存在か、その答を述べると言われてもすぐにはできない。突然現れた迷惑な居候、しかし、それ以上の何かを凜が感じているのも確かであつた。

彼女の新鮮な迷惑さは、妙に心地がよかった。

「良い水だった」

一声。

風呂場から雪音が出てきた。

「あ……あつ！ ああ！」

雪音の姿を見るなり、凜は顔を真っ赤に染め、口をぱくぱくさせる。

「ゆゆ、ゆつゆゆゆ雪音さん！」

「ん……？ どうかしたのか。そんなに顔を赤くして」

凜がそうなるのも無理はない。

雪音は全裸だった。

濡れた黒髪をバスタオルで拭きながら、一糸まとわぬ強烈な白美の裸身を惜し気もなくさらけ出していた。濡れているために身体に張り付いている長髪が艶めかしさを助長している。まだ身体は若干濡れていて、すらりと伸びた足を伝って、水が床を濡らしていた。

「ふ、服っ！ 服を着てくださいっ！」

雪音の身体を指さしつつ、力一杯目をつぶりながら叫ぶ。

「なんだ。そんなことか。良いではないか。女同士、何を恥ずかし

「があることがある」

（そういえば……僕、今は女の子なんだった……）

凜は思い出すが、

「でもだめです！ 着てください！」

全力で食い下がる。ここで同調してしまつたら、凜は人として大切なものを捨て去ることになってしまう。幸太郎よりも先に変態の極地に到達するわけにはいかない。

雪音は、むうー、とつまらなさそうな顔をしたが、凜の必死の訴えが届いたのか渋々了承した。

「ま、恥じらいを持つというのも女として大切なことだな。……ふむ」

しばし雪音は考え込んで、

「そうだ！ せっかくだからそなたの服を着てみたい！ うちもたまには和服以外のものを着てみたいのだ」

ぽんと手を叩き、満面の笑みで言った。

「わ、わかりました。貸しますからとりあえずタオルで身体を隠してくださいっ」

凜は急いでダンスの中から先程買ってきた服を取り出す。背丈は凜がわずかに下回る程度なので服のサイズは問題ないだろう。

服を持って風呂場の前へ行く。

雪音はその間に凜の頼みを聞いてくれていたらしく、身体にバスタオルを巻いていた。足元は相変わらず濡れたままだったが仕方ない。

凜は洋服とスカートを手渡した。生地が厚めの黒い服で、胸元あたりにギャザーが施されている。サイズは若干大きめで腰のあたりまで覆ってくれる。スカートはシンプルなもので、これも丈は長め。魅魚曰く、男であるとバレにくい服その一だそうだ。

「んむ。かたじけない」雪音は服を受け取ると、風呂場へと戻っていった。

目の前で着替え始めなくてよかった、と凜はほっとする。

数分して、雪音が出てきた。

「なかなか上手く着られずに手こずったが……どうだ、似合うか？」

雪音はくるりとその場で一回転してみせた。スカートが靡き、黒髪が宙を泳ぐ。

「あ……は、はい！　きれいです。とっても」

正直な感想だった。純白の和服に身を包んだ雪音も綺麗だったが、それとは正反対の黒でまとめられた洋服姿も落ち着いた大人の雰囲気があつて良い。

「そうか！　ならばよい。うちもこれが気に入った！」

そう言つて、機嫌よくスキップをするように部屋の中へと駆けていった。

13 / 女装遊戯

「それじゃ、これ食べていてください。ぼ……私はちょっとお風呂入ってきますから」

凜は凍ったままのから揚げを皿に盛り付けると、それをテーブルへ運んだ。温める手間が省けるのでこれはこれで楽だなと思う。

「むう……今夜はころっけではないのか」

雪音が不満げに言った。

「もう無くなっちゃったので明日買ってきますね」

「そうか……なら仕方ない。楽しみにしている」

雪音はツンと不満そうに唇を尖らせながらも納得する。

凜は着替えを持つと風呂場へ向かった。

魅魚から女物のパジャマを借りていたのだが、やはりそれを着るのに大きな抵抗があった凜は着替えとしてジャージを着ることにした。

昨夜は男物のジャージを着ていたらバレてしまうと考えたが、学校指定のジャージであれば、男子と女子での違いは見た目に大差ないので大丈夫だろう。雪音がそこに気づくとも思えない。それに寝るときも楽だ。下着ももちろん男物である。

凜は風呂場のドアを開けた。

「う——」

そして、息を呑んだ。

「北極……」

連想したのはまさしく氷河——氷の世界。

風呂場は凍りついていていた。浴槽には冷水が溜められており、そこに無骨な氷塊が浮かぶ。壁は氷の膜で荒々しくコーティングされて

いて、もしここに白クマでもいれば、北極の一部を切り取ってきて貼り付けたと思えるような光景だった。

「さ……寒すぎる」

凜は自分の身体を抱くようにして擦った。身震いが止まらない。ただでさえ外では雪が降るほど気温が低いというのに、風呂場は冷凍室のようになっていいる。おそらく雪音にとってはこれこそが快適な環境なのだろう。彼女が冷蔵庫の中を気に入っていたのも納得できそうな気がした。

浴槽を使うのは諦め、シャワーだけで済ませることにする。このままでは寒いので、壁に熱いシャワーをかけて氷を溶かした。さっさと身体を洗い、ジャージを着ると、風呂場を出た。

部屋に戻る凜の姿に気づくや否や雪音が声をかけてきた。

「待ちくたびれたぞー。腹が減って死にそうだー」

雪音の前には、先ほど出したから揚げがそのまま残っている。文句を言いたげな表情で凜を見ていた。

「あれ。から揚げは気に入りませんでしたか？」

凜はテーブルを挟んで雪音と向かい合うように腰を下ろす。

「そうではない。うちはそなたが風呂から出るのを待っておったのだ。一緒に食べた方が美味しいのは当然であろう。さあ、食べよう一緒に」

「えっ……」

凜の心臓がドキリと跳ねた。胸が締め付けられるような感覚とともに。

「あ。待たせてすみませんっ。それじゃ、自分のをすぐに用意してきますね」

急いで立ち上がり、台所へ行くと自分のから揚げを冷凍室から取り出しレンジへ入れる。

（ふう……）

凜は一息つき、額に手を当てる。

慌てて席を立ったのは、すぐに自分の食事を用意するためだけではないかった。

雪音に、今の自分の表情を見られるのが恥ずかしかったからだ。

凜は鏡を見ずとも自覚できるほど、驚きと喜びの入り混じった幸せな笑顔を浮かべていた。

雪音の一言が――嬉しかった。

待っていてくれた――それが嬉しかった。

単に食事を一緒にとろうというそれだけのことだったが、それが凜の心にはとても強く響いた。まるで心の前に立てかけた壁など簡単に通り抜けて、あっさり心の鐘を叩き鳴らされてしまったような不思議な感覚だった。

「やっぱり……うん。ひとりじゃないって、いいな」

凜は誰にも聞こえないように、小さな声でそう呟いた。

14 / 女装遊戯

部屋の明かりを消した。凜は敷いた布団へ横になると、毛布をかぶる。

雪音は昨晚と同じように畳の上に直に寝転がった。凜が布団も無しで痛くないのかと尋ねると「問題ない」と一言で返された。

部屋には、街灯や月明かりによる微光がカーテン越しに当てられている。とはいえ家具の輪郭がうつすらわかる程度で、暗いことに変わりはない。

凜は目を閉じ、そのまま眠ることにする。

すぐ近くに雪音がいるため自然と緊張してしまい、逆に意識がはつきりしてきてしまうが、できるかぎり何も考えないように努める。昨晩は雪音という未知の存在に対する恐怖や不安による緊張が大きかったが、今は親しみや、雪音に対する興味という意味合いでの緊張が強かった。

数分して、

「起きておるか」

雪音の声。

暗いので彼女の表情まではわからない。

「起きていますよ。どうかしましたか、雪音さん」

何かあったのだろうか。雪音の場合、何を言い出すかわからないので凜も色々と予想してみるが、やはり見当はつかない。

「……いや。なんとなく、声をかけてみた。それだけだ。邪魔をしてすまぬ」

意外にも雪音の発言に意図はなかったようだ。

「邪魔だなんて、そんなことないですよ。私だって眠れなくて退屈していましたし」

初めてすんなりと自分のことを『私』と呼べたことに安心と悲し

みを感じつつ、凜はせっかくなので雪音と話をしてみることにした。出会ってからごたごたの連続だったので、ゆっくり落ち着いて話をする機会も無かった。

「雪音さんは、雪女なんですよね」

「うむ。そうだ。それがどうか……んう。そなた。もしや、まだ信じられぬと申すか」

「い、いえ。そうじゃありません！」

また雪女の証明と称して奇怪なことをされては堪らない。危惧した凜は慌てて否定し、気になっていたことを尋ねた。

「どうして男嫌いの雪音さんが、わざわざ人間の住む町へやってきたんですか」

雪音は極端なくらいに人間の男を嫌っている。それなのにわざわざ人間が住む地域にやってきたのにはそれなりの理由があるはずだ。「うちが人里へ下りてきた理由が……うむ」

雪音は考えるようにしばしの間を置く。

そして、真剣な声でゆっくりと、

「ふむ……他人に話すのは、少々照れ臭いが……そなたなら、よろう。命の恩人でもあるしな」

雪音のいる方向から、がさがさ……と物音がした。

何だろうと、凜はそちらを振り向く。

暗くてよくわからなかったが、すぐ目の前に人の気配を感じ、雪音がこちらへ近付いてきたのだと理解した。布団で寝る凜の隣——布団と畳の境目辺り——で雪音は再び横になったようだ。

「気恥ずかしいからな……小声で言っぞ」

「はい。しっかり聞いています」

小声で話す雪音と同様、凜も小声で返す。

「む、馬鹿者。そんな風にかしこまれたら言い辛いではないか」「すみません……」

「別に謝らなくともよい」

「す、すみません……！ あ、また……」

「はは。そなたは面白いやつだ。では……」

雪音は仕切り直すように咳払いをひとつして、

「教えてやろう。単純なことだ。うちはな。——家族が欲しくなった」

「家族……」

予想していなかった言葉であると同時に、それは凜自身が心に抱えている気持ちと似ている気がした。

「雪女の場合、人間でいう女と男のように対になる存在が無い。しかし、子は出来る。それは雪わらしや雪ん子と呼ばれる類のものだ。創り方は……まあ色々あるのだがな。雪を基にして精気を注いで創り出した人形のようなものであったり、実体を持たせずに——いわば霊体のような状態で人間に憑依させる場合もある。」

たいていの雪女は大人になると雪わらしを作り、我が子として育てることを楽しみとするのだ。本来は自分の分身や身代りとして創られていたものだったが、いつの間にか風習も変化し、今では人間の子育ての真似事をする雪女が多いのだ」

「なら、雪音さんも雪わらしを創れば家族が……」

家族ができる。男と関わる必要もない。単純だが的を射ているはずだ。

その凜の考えに、雪音はもどかしそうな声で答える。

「それはできぬ。うちは少々他の雪女と事情が違っておつてな。能力的には創れぬことはないのだが……しかし創るわけにはいかぬのだ。山の掟で禁止されている」

「創りたくても創れない……」

「うむ。しかしそれで簡単に気持ちが割り切れるものでもない」

雪音の口調が段々と熱のこもった、しかし沈鬱さを内包したものへと変わっていく。

「あるとき、うちの住む雪山に人間の親子がやってきた。うちはそ

れを眺めているだけだったが、その仲睦まじい姿を見ていて……ふと心の中に沸いた小さな感情に気がついた。家族が欲しい、我が子が欲しい、独りは嫌だ、独りは寂しい。突然湧いた初めての感情にうちは戸惑いを覚えた。それでも最初の頃は耐えていたのだが……それにも限界がきた」

そして雪音の口調はさらに転じ、静かなものに変わっていく。

「抑えられない気持ちをどうしてよいのかわからず、気づけばうちは人里へと下りてきていた。一時の気の迷いで、人間の男を誘惑しようとしたのかもしれぬ。子が創れぬならせめて番をと自棄になつていたのかもしれぬ。」

しかし、いざとなつてみれば男嫌いのうちがそんなことを出来るわけもなく、結局はただ町を彷徨うだけとなり、気がつけば身体は衰弱しきつていた。人間の男の精気を吸えばそれで済む問題だったが、そなたも知つての通り、うちは他の雪女と違って男から精気を吸わぬからな。そうして……」

あの交差点で凧と出会つたのだと雪音は付け足した。

「雪音さん……」

独りの寂しさを感じていた雪音の気持ちを使い、凧の声の調子も少し落ちる。

孤独を感じると胸が痛む。それは凧も同じだ。だからこそ雪音の感じていた寂しさを推し量ることもできるし、その辛さや苦しみが自分のことのようにさえ感じられる。

そんな凧の胸中を察してか、

「だがな」

雪音は気を取り直すように明るい声でこう言った。

「今のうちは寂しくないぞ。——そなたが、いるからな」

雪音のその言葉は、凧にとって驚くべきものであると同時に、本当に嬉しい言葉でもあった。

「……………」

しかし、どう返事をしていいかわからなかった。自分も同じ気持ち

ちだと素直に言えばよかったのだが、そう簡単に口は動いてくれなかった。

それは、男としての凜ではなく、女としての凜に向けられた言葉だったからだ。

凜が本当は男だと知ったとき、それでも雪音は同じことを言ってくれるだろうか。

いや、そもそも偽りを続けている自分に、彼女の気持ちを受け取る資格があるのだろうか。

悪意はなく、流れでそうなってしまったとはいえ、雪音を騙しているという事実が凜の胸を締め付ける。雪音の言葉は嬉しい。しかし、偽りの——女の自分を演じている限り、素直に喜ぶことはできない。

それでも今答えられる範囲で正直な気持ちを伝えようと、ひとまず心を落ち着ける。そして、口を開く。

「雪音さん……。わ、私も……。あれ？」

「……………すう……………」

静かな寝息が聞こえた。

暗闇に慣れてきた目を凝らして見てみれば、雪音はもう眠ってしまっていた。

幕間

それは――。

登山が好きだった父の提案で雪山へ出かけた。

両親と一緒に三人での登山だった。

その山は、登山とスキーの両方が楽しめるといったものだった。

まず山を登り山頂へ行き、その後ペンションへ向かう。そこで一泊したあとにスキーをして帰るといった計画が立てられていた。

天気予報では晴れ間が続くと出ていたし、実際、清々しいほど空は澄み渡っていた。

登山の楽しさも倍増し、どんどん道を進んでいった。

ざくざくと、長靴で雪を踏みしめる音が楽しかったのを覚えている。

雪山ではあるけれど、登山用に道はある程度舗装されており、それほど苦にはならなかった。

雪に彩られた山道はまるで異世界のような、幻想的な美しさを感じさせていた。

山道に行く。

登山好きな父が慣れているのは当然のことだが、母も結婚前から父とよく登山をしており慣れていたらしい。

だからペースを合わせてくれていた。

もう少し早く歩いていれば、早くペンションにたどり着いていれば、違う結末が待っていたのだろうか。

ときおり休憩を挟みながら、無理のないペースで進んでいく。
山頂へついたのは昼間の三時頃だった。

雪で覆い尽くされた山々、どこまでも続く白銀世界。

そこから一望できる景色はまさに絶景で……だから、こんなにも
綺麗な山が、まさか牙を向けてくるだなんて思いもしなかった。

遅めの昼食をとり、ペンションへと向かうことにした。

——それは、その道の途中で起きた。

「吹雪いてきやがったな」

ぼそりと呟く父の声。

山の天気は変わりやすい。よく聞く言葉だ。

山頂から移動を始めて数十分後。

急速に雲行きが怪しくなり、雪が降り始め、その数分後には風が
強くなった。

気づけば吹雪となっていた。

気温は急激に冷え込み、防寒着を着ているにもかかわらず身体が
震え始めた。

あちこちで雪がうず高く積り、どこが道なのかはもう認識できな
くなっていた。

積雪に足がとられ、思うように進めなかった。

「まずい。早くここを離れないと……。慣れているからってインス
トラクターをつけなかったのは、まずかった」

父の声。

今いる場所よりも上方は斜面が急になっている。積もった雪が崩
れてくれば雪崩に巻き込まれ、下敷きになってしまうのは予想に難
くなかった。

予定していた登山路は比較的安全な場所を経路にしてあるはずだ
が、積雪で道を見失ってしまい、すでに経路から外れてしまってい

たのдарう。

「あなた、もう少しゆっくり進んでください。この子が……」

母の声に、気づかぬうちに歩く速度を上げてしまっていた父が振り返った。

「すまない。大丈夫か。歩けるか」

父の問いかけ。

体力の消耗は著しかった。幼い身体に慣れない登山と突然の吹雪という負担は大きすぎたのだ。

歩み寄る父。

その時だった。

まるで巨大な化け物の唸り声のような轟音が山全体に響き、一拍置いて、くぐもった重音が荒波のように連続的な響きをもって鳴り渡る。

「雪崩か！」

父が叫ぶが、

「いや……。今のは、遠方のような」

安堵の息をついた。その雪崩は、ここよりもだいぶ離れた位置で起きているらしかった。

巻き込まれることはないだろう。しかし安心はできなかった。次にどこかで雪崩が起きた時、それに巻き込まれない保証はない。

父に優しく担がれた。

母は心配そうな顔でこちらを覗き込んでいる。その顔には痛烈な哀しみと不安が滲んでいるのに、それでも優しく微笑もうと努めてくれているのが、嫌になるほど印象的だった。

いつの間にか、辺りは真っ暗になっていた。

夜の雪山は未だ吹雪が続いていた。

無理に道を進んだのも裏目に出ていた。道に迷っていた——遭難していた。

皆、衰弱していた。

食料はあるにはあるのだが、それとは別問題で、身体の衰弱が激しかった。

薄らいできた意識をなんとか繋ぎ止め、身体を抱きしめてくれて
いる父の顔を見た。

いつもは逞しく荘厳なその顔は青ざめ弱っていた。それでも、抱
く腕は力強かった。

母も身を寄せてくれていて、不安と衰弱を必死に堪えながら温め
ようとしてくれていた。

地獄のような時間は、まるで無限の苦悶に思えた。

ふと――父の腕が緩んだ。

それに同調するように隣にいる母も目を閉じ、寄りかかってきた。
身を寄せているのではない。母の体重がそのまま押し掛かっ
てい
る。

まるで――意識を失っているような――

「父さん……母さん……？」

途切れがちな意識をなんとか繋ぎ止め、必死に呟いた。

しかし反応はなかった。

身を呈して守ってくれている両親は、直接吹雪の猛威にさらされ
ているのだ。

何か、とても嫌な予感が脳裏を過ぎる。

絶対にあつてはいけない、絶対に起きてはいけない事態。

しかし、それを感じていながら、何もできなかった。悔しく、情
けなく、許せなかった。

ただ両親に守られながら、未来を恐れることしかできない。

だが、それさえ、はつきり認識できなくなっていた。

やがて、深いところに沈んでいくように、意識は薄らいでいく…。

霞む、視界の、中。

目の前に、女性が立っていた。

母ではない。

視界も不明瞭な上に暗くてよくわからないが、着物に身を包んでいる若い女性。

その女性がゆっくりと、こちらへやってきて片膝をついた。

女性の手がこちらへ伸びる。

力なく垂れた頭を起こされた。指先で顎を持ち上げられていた。見つめる女性の瞳が妖しく光った、ような気がした。

「死ぬには——まだ——」

冷たく響く綺麗な声だった。

その女性は静かに顔を近づけてきた。

そして、唇と唇が重なった。

感じたのは冷たい何か。

それは唇の冷ややかさだけではなかったように思う。

表面的には冷たく、けれどそれに反して芯は熱い得体の知れない何かが身体へと注ぎこまれるような、不思議な感覚だった。

間もなくして、意識は暗転していく——。

それは——小学五年生の、冬のある日。

1 / 雪姫

「おはよう、凜！」

威勢の良い雪音の声で凜は目を覚ました。

「ふああ……おはよう、ございます。雪音さん」

凜は眠い目を擦りつつ、身体を起こした。

時計を見ると七時十分前だった。目覚ましをセットしているのが七時ぴったりなので、起床時間としてはちょうどいいくらいだ。

今日は剣道部の朝練が無いため、凜は七時半ごろに出発する予定である。ちなみに、三十分ほどで学校へつくので充分に余裕をもった時間設定といえる。

（……なんだか、ずいぶん昔の夢を見ていた気がする）

内容はおぼろげにしか覚えていないが、自分が子どものころの夢を見ていたような気がした。

それは、忘れたくても忘れられない、凜が両親を失った雪山での事故だ。両親に身体を抱きしめられながら、意識は薄れていき、そこで不思議な女性が現れた。

その後のことは、はっきり覚えていない。

気がつけば病院にいて、ベッドの脇で祖父が自分の手を握ってくれていた。

（そして、父さんたちは……）

——この世を去った。

祖父からそう聞かされたのだ。言うか言うまいか悩んでいるような表情だったが「大切な話がある」と辛そうに語ってくれた。

凜が生きていたことに関して医者は奇跡だと言っていたらしい。本来なら両親とともに凜も死んでいたはずだった、と。

しかし、そんなものは当時の凜にとっては嬉しいことでも何でもなかった。大切な両親がいなくなってしまった。あの事故のとき自分に何ができたわけでもないが、自分だけが生き残ったということが、まるで罪であるかのようにさえ感じられた。凜の胸を、もやもやとした重苦しい感情が圧迫していくようだった。

今でこそ、生きていてよかったと思えるようになった凜だが、それでも両親を助けられなかったことを――幼く無力な自分に何が出来たのかは別として――その悔しさを、無念を忘れたわけではない。誰かを守りたい。見ているだけの、守られるだけの弱い自分を変えたい、強くなりたい、強い心を持ちたい、そういった気持ちから凜は剣道を始めた。

剣道での稽古が、雪山での事故や人を助けることに直結するわけではないが、心の成長、肉体的な成長という意味では、ずいぶん変わったのではないかと凜は思っている。

（とはいえ、魅魚や幸太郎には振り回されてばかりだけど……）

「なに暗い顔をしておるのだ」

「うわぁっ！」

突然雪音の顔が目の前に現れ、凜は思わず後退する。

どうやら自分はずいぶんと不明朗な顔をしていらしたらしい。昔のこと思い出して、つい気持ちが沈みかけてしまっていた。

「いえ、なんでもないんです。朝ごはんの準備をしますね。すぐ、できますから待っていてください」

凜は笑顔を雪音に向けた。もちろん作り物の笑顔などではない。

「んお。そなたの笑った顔を初めて見たような気がするなあ！」

雪音は珍しいものを発見したかのような声で言った。

「そうですか？ そんなにいつも暗い顔をしているつもりはないんですけど……」

「いや、そういうわけではないのだが……。いつも困ったような顔や慌てているような顔ばかり見ているような気がしてな」

「ああ、なるほど……」

その原因はあなたです、と凜は心の中でつつこみを入れた。

「んむ。そなたは、笑っているのが一番だ！」とびきりの笑顔で雪音は言う。

凜は同じことを雪音にも言っただけだと思った。雪音さんも、笑顔が一番素敵です、と心の底から思った。だが、それは心の内に秘め、

「はい。そうします」

短く答え、立ち上がると朝食の用意にとりかかる。

心が弾む。そのむず痒い感覚は、けれど妙に心地よかった。

「どうぞ、昨日と同じですけど」

凜は冷凍のままのから揚げを雪音に渡した。自分のものはもちろん温めてある。

「んむう、から揚げもよいが……うちはやはりころっけが食いたいぞ。うあー。ころっけだー、ころっけが食べたいのだー」

駄々をこねる子どものようである。雪音は冷凍コロツケが非常に気に入ったようで、昨日の夕飯でも似たようなことを喚いていた。

箸が使えないらしく手から揚げをとる雪音はそれを物足りなさそうに眺めている。

そして口へ運ぶ。から揚げそのものに文句は無いようで美味そうに食べてはいるが、少々不満げだ。

「うう……ころっけ……」

「コロツケ、今日はちゃんと買ってきますからね」

昨日も言ったような気がするが、すっかり忘れてしまわないように改めてもう一度口にする。声に出した方が、ど忘れもしにくいだろう。

「絶対だぞっ……絶対だからなあ！」

雪音はなぜか瞳を潤ませて懇願した。

あまり雪音のイメージに合わないその行動に凜はくすりと笑った。

どうやら、冷凍コロッケは雪音の冷静さを欠かせてしまうほどに彼女の心を掴んでいるようだ。

2 / 雪姫

凜は風呂場で制服に着替える。万一にも雪音に着替えを見られな
いたためだ。顔は女性らしい凜だが身体は違う。素肌を見られれば簡
単に男だとバレてしまうだろう。

着替えを終えた凜は、女子制服は未だに慣れないなと苦々しい表
情を浮かべつつ風呂場を出た。

「それじゃ、私もう行きますね」

時刻は七時半を少し過ぎたくらいだった。鞆とリュックを手に取
り、玄関のノブに手をかける。

「今日も学校か？」

どうやらコロツケ症候群（凜による命名）も落ち着いたようで、
いつも通りの調子になった雪音が尋ねてきた。

「そうですよ」

「ならば、うちも行くぞ！」

「……え？」

凜は驚き、目を丸くする。

「うちの居場所としてそなたの住まいを提供してくれるのはありが
たいのだが、一人で留守番は退屈なのだー」

雪音は目を爛々と輝かせて申し出た。しかし、

「だ、だめです！ たしかに退屈だろうとは思いますが……。で
きるだけ早く帰りますから、学校には来ちゃだめです」

雪音を学校に連れて行くのだけはまずい。

なぜなら、その場合凜は学校の中でも女装していなくてはならな
いことになるからだ。ほぼ間違いなく雪音は凜のそばにいるだろう
し、そうでなかったとしても見つからずに一日をやり過ごすのは不
可能に近い。

そもそも雪音を学校まで連れて行ってしまつては男子制服に着替

えるチャンスがなくなってしまう。開き直って女装したまま学校で過ごすというのは論外だ。雪音に男だとバレるのも、クラスメイトから女装癖があると誤解されるのも大問題である。

「なんだ。うちが来ると迷惑なのか……」

「しょぼんとする雪音を見ると「そうです」とは言えない。

「迷惑というか……きつと来ない方が平和というか……」

凜が男だとバレたら、極度の男嫌いな雪音のことだ。平和な解決は期待できない。

「む。さりげなく失礼な物言いだな。うちがくると平穩が崩れるのか」

「そういうわけでもないんですけど……」

「んう、なんだはつきりしない。ならばなにか、学校には平穩を喰らう化け物でもあるのか」

「化け物は——」

いないと言おうとして、ふと、なぜか妖しい微笑を湛えた魅魚の顔が浮かんだ。

「いないこともないです」

精神的な意味では、魅魚は凜にとって化け物と言っても過言ではない。

「そうなのか……。化け物が巣くっているとは、学校とはなんとも危険なところなのだ。——うむ！　ならばうちが退治してくれよう。これでも腕には自信がある」

雪音は腕まくりをしながら言った。

「い、いえ！　そういうのともまた違うので……」

なんだか話が不穩な空気へと変わってきてしまった。これ以上ややこしくなる前に、凜は話を強引にまとめることにする。

「とにかく、学校はだめです！　外を散歩するくらいなら文句ありませんから、それで我慢してください」

「んむう……。ま、それも悪くはないか。仕方のない奴だ」

渋々頷き、

「しかし今は散歩の気分ではないな。……そうだ！　うちは寝ることにする」

雪音は冷蔵庫の前へ駆けていくと扉を開く。そして、あつという間にペットボトルとアボカド、中板を取り払ってしまった。

雪音は冷蔵庫の中で寝るのがお気に入りになっているようだ。

だが、入るには中板を外さなくてはならないし、ジュースも出さなくてはならない。今は無いが食品だって同様だ。アボカドなら常温でも問題ないが、生鮮食材だとそうはいかない。そのため冷蔵庫に居着かれると困るので昨夜「入らないでください」とお願いしておいたのだが……。

凜が注意する間もないくらいの早業で、雪音は冷蔵庫の中へ入るとばたんと扉を閉じてしまった。

「ああ……なんて人だ……。でもまあ仕方ないか。今日くらいは、いいかな……」

一人で待つていなくてはならない雪音のことを考えると、あまり強く言うのも気がひける。今は食品も入っていないし、ジュースも出していた所で品質に問題が出ることはないだろう。

「わかりました。今日は冷蔵庫の中に入っけていてもいいです。今日だけです。それじゃ、行ってきますね」

『うむ。気をつけてな』

冷蔵庫と挨拶を交わしたような気分になりつつ、凜はアパートを出た。

3 / 雪姫

高校へ向かう道、凧は今朝見た夢——雪山での事故のことについて考えていた。

意識を失う寸前に現れた着物の女性。

——あれはいったい誰だったのだろう。

雪山で、あんな格好をしていて。普通じゃないのは明らかだったが……。

凧はなんとかあの女性の姿を思い出そうとするが、ずいぶん昔のことだし、ほんの数秒、それも意識を失いかけていたときなので、顔すらよく覚えていない。

あの雪山の事故から生還できたのは、救出後の医者の治療のおかげだけではないと凧は考えている。

雪山で女性に口づけされたとき、不思議な感覚——身体の中に活力の源を注ぎこまれるような——を受けた記憶があるのだ。それがあつたから命を繋ぎ止めることができたような気がしていた。

「あ……」

交差点を渡ったところで、またも魅魚に遭遇した。

「ふふふ、今日もちやんと女の子しているわね」

出会って早々に妖しい笑みを見せる。そして凧の横に並んだ。

「今日もかわいいのね。日に日に魅力が増している気がするわ。この調子でいけば……」

「魅魚……もしかして僕のことを待ち伏せしていたりする？」

半ば諦めムードで凧は尋ねる。

昨日と今日では時間帯が違う。偶然会ったというにはあまりにも出来すぎだ。

「そうね。昨日は偶然だったけれど……今日はここで待っていたのよ。あなたの可愛い姿を確認するためにね。うふふ」

凜は魅魚に助けを求めたことを後悔しそうになった。雪音がいる間、毎朝こうして魅魚に待ち受けられて、女装姿を玩弄されるのかと思うと気が重い。

凜が通学に使う道は、公園までであれば他の生徒——とくに凜のクラスメイト——は利用しておらず、まず出会うことがない。被害が拡大しないのが唯一の救いだった。

公園に到着した。

「僕ちよつと着替えてくるから」

凜は一秒でも早く男子制服へ着替えるべく、公園のトイレへ駆け込む。

凜の女装を除けば、普段と変わらない一日の幕開けのはずだった。

4 / 雪姫

午前、午後、ともに授業は終了した。

余談だが、昨日の昼に妙な薬を混入させたアボカドパンを食べて気絶した幸太郎は驚異的な回復を見せており、今日の昼には普段と変わらぬ様子で騒いでいた。そしてこれまた普段と変わらぬ調子で魅魚に痛い目に合わされていた。

今は放課後、剣道部での部活動中である。

部員の皆が道着に着替え終え、いつものように、準備運動から練習は始まる。

のだが、肝心の部長——雨宮の姿が見えない。かわりに指揮をとっているのは副部長の女生徒だ。

雨宮の不在が気になった凜は、副部長に気づかれないように小声で、

「あれ。今日は雨宮先輩はいないんですか」

隣の女子部員に尋ねた。彼女も三年生で雨宮と同じクラスだったはずなので何か知っているだろう。

「ああ。なんだか用事があるとかで、授業が終わったらそのまま帰ったよ」

「そうなんですか。それじゃ、しかたないですね」

雨宮が今日の部活動を欠席するらしいという返答に納得はした凜だが、珍しいなとも思う。雨宮は練習熱心な生徒だし、部活動とはいえ学校の活動の一環なのだから、休むというからにはそれなりの理由があるだろう。

もちろん雨宮の個人的な事情についてあれこれと深く詮索するつもりはないが、気になるのは確かだ。

「用事ってなんなんでしょうね」

凜はおもむろに呟く。

「さあ……。雨宮さんって心も広くて友達も多い親しみやすい人だけど、その半面、謎の多い不思議な人でもあるから」

「そうなんですか」

「うん。たとえば――」

「こちらそこ。部活中なんだから私語は慎むように」

副部長から注意が入った。ふたりは「すみません」と謝ると、準備運動に集中することにした。

5 / 雪姫

雪雲越しにさす斜陽は、群青の空を背景に橙光が走る不思議な景色を作り出す。

凜のアパート。

その静かな部屋に、冷蔵庫の扉を開く音が響いた。

「んうー……少々寝すぎてしまったようだ」

中から雪音が出てくる。昨夜借りた凜の私服（女物）を着ているが、髪と瞳は雪女の状態——銀色をしている。

窓から夕陽がさしているのを見て今の時間帯を予想し、雪音は自分が相当な時間寝ていたということに気づいた。それくらい冷蔵庫というのは居心地も寝心地も良い。

「りーん。いないのかー」

冷蔵庫の扉を閉め、台所や部屋を眺めてみる。誰もいない。風呂場やトイレものぞいてみるが、結果は同じだ。

どうやら凜はまだ帰ってきていないようだった。

「むう。早く帰ると言ったくせに」

不満に頬を膨らませ……ふと雪音は、

「うちは……凜の帰りが待ち遠しいのか」

はっと気づいて独りごちた後、数秒置いて顔を赤くした。

「ち——ちがう！　うちは冷凍ころっけの到着を待ちわびているだけだっ。べっ、べっに凜がいなくて寂しいわけではないのだからな！」

自分の呟きに自分で反論する。まるで誰かと討論しているかのようだ。

「そもそも凜は女なのだぞ。そして……種族は違うが、うちだって女だ。女同士でなど……。それに凜の気持ちがどうなのかという問題もあるではないか！　し、しかしまあ、うちは男嫌いなものだから、

凜が望むのなら女同士でもべつに……ってうちは何を言っておるのだ！ んぁーんぁー！」

自分で自分につっこみを入れつつ、雪音は溜め息をついた。雪山にいたころ、雪音は独りだった。雪女同士はあまり互いに干渉しないし、雪音の場合は雪わらしを創って子どもとして育てることもしない。

だから、雪音は孤独だった。

それが嫌で自然と家族が欲しくなった。どうすれば解決できるかわからず、何の当てもないまま人里へ下りて、そして凜と出会い、今はともに暮らしている。まだ数日でしかないが、ずいぶん親しくなれた気がする。

それは雪音と凜が似ているからだ——と雪音は思う。

どこがどう似ているのかと問われるとうまく答えることができない。しかし一緒にいると伝わってくる何かがある。感じる想いがある。たとえば、大きさの違うふたつの雪玉を重ね合わせればひとつの雪だるまになるように、それぞれ独立しているものが繋がりあうことで新しいものを形成するような一体感というか……。

「そうだ。散歩に行こう」

妙な気分になってしまった。気分転換に散歩をするのも悪くない。雪音は髪を黒に変えて人間として違和感のない姿になり、玄関へと向かう。

凜は散歩くらいならしてもいいと許可を出した。ならば散歩がてらに学校へ行つてしまおう。散歩をしていたら、意図せず学校にたどり着いてしまったということにすればいいのだ。

外に出て、誰かに道を尋ねれば学校の場所もわかるだろう。

雪音は外に出た。アパートの階段の踊り場から、夕陽の映える雪景色を見回してみる。

と、早速、人を発見した。

姿勢よく歩く小柄な黒髪の少女だ。手には紙製の大きな袋を提げていて、切り揃えられた前髪が特徴的だった。一見幼く見えるが、落ち着いた雰囲気を考慮すると凜に近いくらいの年齢かもしれない。「その人！」

雪音は踊り場から声をかけた。

呼ばれたことに気づいたようで、少女は立ち止まってくれた。

雪音は急いでアパートの階段を降りて少女の元へ行く。

「何か用かしら」

少女は幼い風貌とは正反対の大人びた声音で答えた。声質はそうでもないのだが、喋りの調子や間がずいぶんと落ち着いている。只者じゃないと雪音は思った。

「んむ——。道を尋ねたい。学校という場所がどこにあるか知りたいのだ」

単刀直入に問う。道を聞くだけなので、わざわざ名乗る必要もないだろう。

少女は思案するように数秒沈黙し、

「この辺りだと、小学校、中学校、高校の三つがあるのだけど、どれを知りたいのかしら」

どうやら学校という場所は複数あるらしい。

凜がいるのはどこだ、と雪音は考え込む。「凜のいる学校を知りたい」と言ったところで、その凜とは誰なんだという話になってしまふ。どう尋ねるのが得策かと考え、

「それぞれの学校に何か特徴はあるのか？」

とりあえず、その三種類の学校にどういう違いがあるのかを聞いてみることにした。場合によっては、凜との関連性がわかるかもしれない。

「そうね……。まず小学校というのは幼女や小さな男の子が通っているところよ。一部の特殊な趣味を持っている人間は、その様子をこっそり覗くことに快樂を得たりするとかしないとか」

「どうも危険な場所なのだな」

けしからん……と雪音は眉間にしわを寄せた。

「でも、実際に事件が起きたってという話はあまり聞かないから安心していいわ。」

次に中学校だけど……小学生より少し成長した女の子や男の子が通っている場所ね。わたしの知り合いに、その女の子たちをいやらしい目で狙っている変態がいるわ」

「む……そこも危険だな。いや、その知人とやらが危険なのか」

「最後に高校は、子どもと大人の狭間で揺れる多感な青少年たちが通う場所よ。ここもわたしの知り合いが狙いをつけている場所ね」

「むむむ……！ その知人、許せぬな！ そなたから注意はせぬのか！」

雪音は怒り気味に言うが、

「馬鹿は言っても治らないから仕方がないの」

少女は肩をすくめて呆れ顔をしてみせた。

「その知人というのは……男なのか」

「ええ。男ね」

「むーやはり男か……！ 男にろくなやつはおらん！」

雪音は「やはり人間の男は最低だ！」と心の中で悪態を吐き、しかし今はそれどころではなかったと気持ちを切り替える。

と、そんな雪音の様子を見ていた少女は一瞬何かを試すような表情をし、補足するように言った。

「ちなみに、わたしは高校に通っているわ」

「ふむ……」

そこで雪音は気づいた。少女の格好を見てひとつ思い出したのだ。「そういえば、あれはそなたと同じ服を着ておったな。うむ。そなたの物と全く同じだ」

その発言に少女は少し驚いたような顔をし、しかし凜のアパートをちらりと見るとすぐに元の落ち着いた表情に戻る。

「きつと、あなたが探しているのはわたしの同級生ね。それじゃ、高校の場所を教えてあげる」

ふふと微笑を浮かべると少女は高校までの道のりを教えてくれた。
「せっかくだから案内してあげましょうか」

「いや、大丈夫。ほぼ直線だし、建物自体にも特徴があるようだからな。自力で辿り着けるだろう。礼を言う。それでは」

雪音は律義に深々と頭を下げると、教えられた道を歩き出した。

6 / 雪姫

走り去る美女の後ろ姿を見送り、魅魚はアパートの階段を上り始めた。

そして凧の部屋の前に立ち、インターホンを鳴らす。
しかし、反応はない。

（まだ凧は部活中のようね。それにしても……居候さんがいるって言うていたけれど……うふふ、やつぱり、あの人のね。凧にしてはやるじゃない。なかなかの美人だわ）

魅魚は新しいおもちゃを手に入れた子どものような気持ちで微笑を浮かべる。

（このアパートに住む霞西高の学生は凧ひとりだけだから、その知り合いとなれば間違いないわね。それに男嫌いみたいだし……案件は満たしているわ。——あら、鍵が開いている。不用心）

魅魚はノブを捻り、ドアを開けると中に入る。そして凧へのプレゼントの入った紙袋を玄関の適当なところに置くと、再び外へ出てドアを閉めた。

明日はどんな風にからかう。そんなことを思いながら、魅魚は凧のアパートを後にした。

7 / 雪姫

同じく夕方。いわゆる帰宅部である幸太郎は、雪の降る街路をひとり歩いていった。

「夏に雪とは、奇跡の前触れか」

昨日から降り続いている雪と、それが積もる周囲の街並み。それらを眺め幸太郎は感慨深く呟いた。ただし幸太郎の言う奇跡とは、不純なもので間違いない。

邪な期待を胸に幸太郎が向かうのはバイト先のコンビニである。

自称女体研究家の彼だが、その研究から稼ぎが得られるわけはない。それどころか日々の研究、実験、調査にはそれなりの出費がある。そのための資金稼ぎに幸太郎はアルバイトをしているのだ。

表向き霞西高校はバイト禁止なのだが、そんなものは体裁程度の校則である。実際のところはバイトをしている生徒も珍しくはないし、それをとがめる教師もほとんどいない。

幸太郎は雪道を歩きつつ不純な妄想を膨らませ、さらにそれを実現するべく計画を練る。そして話し相手がいるわけでもないのにそれを声に出す。

「例えばだ。オレが道を歩いていると、突然美少女が歩いてくる。

そう、あんな……風、に……。おお……あ、あれが奇跡か……ザッツ奇跡」

見れば、幸太郎の十数メートル先の辺りから美少女と称して差し支えない女性が歩いてきていた。

しかし、ただ美少女を見つけたという程度ならさして珍しいことでもない。幸太郎がそれを奇跡と称したのにはそれなりの理由がある。

ひとつは、彼女は『白の着物』を着て歩いていたという点。何か和の風習があるわけでもない霞町で着物を着て外を歩く人間など、

夏祭りや初詣のような特別な行事を除けば、幸太郎は今までに見たことがなかった。

「和装の女性か……これは盲点だった。しかも白とは、変わった趣向だ。非常にそそられる。セーラー服やスク水にナース、バニーと色々研究してきたが、和の心をないがしろにしまっていた。あれは女体研究の重要なサンプルになる！」

幸太郎はぶつぶつと呟きながら彼女の観察を続ける。

ふたつめの特徴として、その髪の色があげられた。茶髪や金髪にしている女性ならばしばしば見かけるが、彼女の髪は『変わった色』をしていて――。

――と。彼女が、幸太郎の目の前で立ち止まった。

思わず幸太郎も立ち止まる。

せつかくだから声でもかけてみようかと、幸太郎は口を開きかけ――しかし、言葉を発することはできなかった。

彼女と視線が交錯している。その瞳は幸太郎の目をじっと見つめている。

なぜだろうか。喋ろうにも身体に妙な拘束感があり、喋る気になれない。

無意識に彼女の視線に呼応するかのごとく、幸太郎も彼女の瞳を見つめ返していた。

彼女は無言。

そして幸太郎も無言。

やがて――

彼女の瞳が、うつすらと光った気がした。

それとほぼ同時、まるで周囲が凍りついたかのような錯覚を感じ――

（いや、身体が、動かない……っ！）

幸太郎は自らの身に起きた異変に気がついた。何か見えない力に抑えつけられたかのように身体が自由が失われ、身動きをとることができなかった。幸太郎の視線も同様、彼女の姿をとらえたまま逸らすことすら許されない。

ふうっ——と彼女が微かに笑った。

彼女はゆっくりと歩を進め幸太郎へ歩み寄る。

その冷やかな手が幸太郎の胸元へ添えられた。

未だに自由を奪われたままの幸太郎は、何の抵抗もすることができない。

（だ、だが……抵抗できずに弄ばれるのも……いいっ……！）

この期に及んで不埒な思考を巡らせる幸太郎の根性も筋金入りではあるが……しかし、次の瞬間にはその思考さえ停止する。

——身体が、凍り始めていた。

彼女の手が触れた場所を中心として、白く半透明な氷の塊が波打つように拡大しながら幸太郎の身体を覆っていく。

やがて無骨な氷の蓑が幸太郎の上半身を覆い尽くした。ごっごつとした円柱状の氷の塊から幸太郎の顔と足だけが露出したような状態になる。

最も原始的な感情——恐怖だけが幸太郎の思考を支配した。血の気が引いていく。全身が凍えているが、震えるのは寒さのせいだけではない。

まるで首筋に何本もの刃物を突き付けられているような、理不尽な恐怖感が擦り寄ってくる。

彼女の目がずっと細められた。

そして彼女はゆっくり歩み寄ってくる。

その耽美な顔が、幸太郎の顔へと近づく。

（……………！）

互いの唇が触れる寸前。

「——感知した。近くに、いる」

彼女は呟くと、幸太郎の身体を突き飛ばした。

まったく身体が自由がきかなくないため、幸太郎は受け身をとることもなく近くのゴミ捨て場へと突っ込んだ。

彼女が走り去っていく。方角としては霞西高の方へ行っただろうだが、幸太郎はそれを視界の隅に捉えるのがやっとだった。

恐怖からは解放されたが、全身を覆う氷塊はそのままだった。身動きは取れず、全身を倦怠感が支配し、どうすることもできない。

幸太郎の意識がだんだんとぼやけていく。

視界が暗転し、意識があやふやになってきたそのとき、「やっぱり、あの子がこの町にきていたんだね……」

先程とは別の女性の声が出た。

意識が虚ろで、誰の声なのか判然としない。視界も同様に虚ろで、誰がいるのか、わからない。

「きつと——早乙女くんの——を狙って——」

（早乙女……？ 凜の、ことが……？）

——突如。

大きな衝撃が幸太郎の身体に走った。

（うぐっ！）

獰猛な野生動物に体当たりされたような凄まじい痛みだったが、次の瞬間には身体が軽くなったのがわかった。今の衝撃で全身を覆う氷が割れたのかもしれない。

「なんとか——しないと」

その女性がまた何か呟いたのと同じ時、ひとの気配がなくなった。

数分後、幸太郎の意識がはっきりと回復し、身体が自由が戻った。

ころには、そこにいるのは幸太郎ただひとりだった。

「いったい、今のは何だった」

痛む頭に手をあてながら首を軽く振る。

周囲を確認してみるが誰もいない。

「ひとりめはオレの知らない女だったが、ふたりめは確か凜の部活の……いや、違うか……ん？　なんだったか……」

思い出そうとするが、海の潮がひいていくようにだんだんと記憶がおぼろげになり、消えていく。やがて、

「ダメだ。思い出せない」

あれは夢だったのではないか、そう思えてきてしまう程に記憶は薄らいでしまった。

幸太郎は記憶の糸を手繰るのをやめ、その場から離れることにした。

8 / 雪姫

部長の雨宮が不在であるという点を除けば、剣道部の練習はいつも通りに終了した。

着替えを終え、剣道場を後にした凧はひとり廊下を歩く。

練習による疲れはあるものの、しかしそれは清々しい疲れで、凧の気持ちは妙に高揚していた。

雪音に「早く帰る」と言っておいたからだろうか。早く帰って雪音の顔が見たいなと凧はそう思っていた。

「あ。そうだ、今日こそは食べ物を買ってこなくちゃ」

食料品が切れていたことを思い出す。気持ちはやって、危うく買い出しを忘れるところだった。

今日買い忘れると、冷凍食品はおろか食べる物自体がなくなってしまう。その事態は避けなければならない。アボカドも魅魚専用のものなので、できれば手を出したくないし、どの道それでは主食にはなり得ない。

「それと冷凍コロッケ」

雪音のリクエストも忘れてはいない。

「遠回りになるけど、買い物してからアパートへ帰ろう」

凧は靴に履き替えると、今日の夕飯を考えつつ校舎を出た。

雪はまだ尚降り続けている。

幸いにも勢いは弱く、極端な積もり方はしていないので帰り道がつらくなることはなさそうだが。

「そうだ。異常気象のこと……。帰ったら雪音さんに聞いてみよう。雪女の雪音さんが町に来たから雪が降っているんだと思うんだけど、だとしたら止めてもらわないと……」

凧は校門へ向かって歩き出そうとし、なんとなく——もしかしたら何かの気配を感じたのかもしれない——後ろを振り返り、

そこに、強烈な違和を見た。

「見いーつつけたあー！」

そこにいたのは『白い着物』を着た少女だった。

一瞬、雪音が学校に来てしまったのかと思ったが、それは違う。袖が極端に大きく、しかし裾はミニスカートのように短いアンバランスな着物だった。和服というより浴衣と言った方が近いかもしれない。雪音が着ているものとはだいぶ違う。そもそも今日、雪音は和服ではなく凧の女物の私服を着ていたはずだ。

そして何よりも、決定的に違うのは髪の色。なんとも『変わった色』——それは『水色』をした髪だった。艶やかでまるで氷のような、とても冷やかな印象を抱かせるその髪を片側で束ねていた。

凧は、少女に何か（あなたはいつ……？）問おうとして。

唐突に。

凧の全身を、冷気が駆け抜けた。

「ぐっ——！」

凍てつく強風に打たれ、体中が冷える。針のむしろで刺されるような鋭い痛みが全身を襲う。

「ははっ。冷たくて気持ちいいでしょう？」

少女は愉しそうな声で凧に問うた。

この全身を襲ってくる異様な風は、明らかに目の前の少女によって起こされたものだ。凧は寒さからくる痛みをこらえ、目の前に突如現れた少女を睨むように見る。

（なんなんだ、いったい——？）

雪景色の校舎前。

ちらつく雪を背に立つ少女の姿を見て。

雪音との差異はあるが、凧はその少女の姿を見て雪女を想起し——

「あっ……！　そう、か……！」

ひとつ、今までの思考における決定的な欠落に気がついた。

(……僕はこんなにも単純なことを見落としていたのか！)

どうして、もっと早く気付けなかったのだろう。

冬のように寒い夏。

それは雪音のせいではない。なぜなら。

——寒い夏という異常気象は、雪音が人里へ下りてくるよりも前から始まっていたじゃないか。

今までの会話の中で雪音は言っていた。山から下りたのは、凧と出会った時点で「三日前」だと。つまり今日を基準に言えば五日前ということになる。

だが、寒い日というのはもっと前——夏だというのにここ数週間は寒い日が続いていた——何週間も前から続いていたじゃないか。

つまりそれは『雪音以外の雪女が既にこの町に来ている』ということを意味している。

そして。それが今、目の前にいる少女なのではないか。

寒さと身の危険で震える凧に構わず少女は言う。

「もう、ずいぶん探したんだからっ！　ごめんねー早く見つけてあげられなくて。あなたの精気の気配を察知するのに手こずっちゃってさ。さっき道端で見かけた男の精気をつまみぐいしようと思ったんだけど、そのときちょうどあなたが近くにいることがわかってねつまみぐいはやめて、大急ぎでこっちへ来たってわけ！」

気が強そうな顔立ちを笑顔にして、雪女である少女は言う。その姿が雪音と重なり、妙な既視感さえ覚えさせられる。

笑顔でありながらも、放たれる少女の不気味で冷たい威圧感を受けながら、

「雪女……」

凧は呟いた。

「えっ？　わかつちゃったの。そっか、雪女を知っているっていうことは……つまり他の雪女との接触があるのかしら？」

少女が雪女であるという肯定と受け取って間違いないだろう。

凜が雪女の実在を知っていることに少女は一瞬驚いていたが、すぐに表情を変えた。笑顔ではない。獲物を捉えようとする肉食動物のように、力強く冷淡な視線で凜を睨む。

「自己紹介がまだだったわね。あたしは、ここめ。あなたの言うとおり、雪女よ。あなたに――会いに来たの」

明るいようであり、内に捻じれた感情を内包しているような暗い雰囲気を感じた。

ここめは凜に近づいてくる。一切視線は逸らさず、凜の目だけを見つめて。

宝石のようなその水色の瞳に、力が宿ったのがわかった。

吸い込まれるような、心を奪っていくような不思議な力を凜は感じ……。

「ぐっ……」

凍えるという感覚だけでなく、身体が本当に凍るように固くなり始めていることに気付いた。無我夢中で、完全に凍りつく前に凜はとつさに飛び退き、ここめの視界から外れる。

すると、凜の身体が自由が戻った。視線から外れることで、見えない力による身体拘束は緩和されるらしい。

しかし人間の動きでは移動距離はたかが知れている。間合い自体はたいして変わっていない。あくまで視線から逃れただけであり、危機的状況であることに変わりはない。

「へえ」

ここめは関心したように目を細める。

「雪女の魅惑の視線を浴びてまだ動けるなんて。うーん、やっぱりあなたが半分しか男じゃないから効果が薄いのかしら……」

ここめはひとりで納得したように呟いた。

半分しか男じゃないという言葉に凜はひどくショックを受けたが、（女顔だということを嘆いている場合じゃない……！）

現状の危機を回避すべく、凜はここめの行動に意識を集中させる。

彼女のしようとしている行為には心当たりがあった。雪音の言っていたことを思い出せばすぐに結論に行き着く。それは、雪女は人間の男を魅了し、虜にして精気を吸う生き物だということだ。

今しがたの、瞳で見つめて身体の自由を奪うというのが虜にするということなのだろう。とてもじゃないが、そんな力に対抗できる気がしない。となれば逃げるしかない。なんとか隙を見つけて……。

しかし、ここめはそれを許さなかった。

「ちょっと痛いかもしれないけど、我慢してね！」

言うや否や、ここめは地面を蹴って跳んだ。虎か何かが襲いかかってくるような、殺気と瞬発力をもって凜に跳びかかる。

「うつ！」

首に衝撃が走る。その痛みを感じてから、自分の首が掴まれているということに気がついた。

「あたしには、あなたが必要な」

ここめは冷たい声でささやく。首を掴むその手も冷ややかだった。

「誰かつ……………うつ」

助けを呼ぼうとしたが、首を締める力が強くなり声を出すのを妨げられた。

まだ部活動をやっている生徒もいるだろうが、それは校舎を挟んで反対側にある校庭で行っている運動部がほとんどだ。教師も校舎の中にいるだろう。都合よく外を眺めている者がいるとは考えにくい。日もほとんど落ちたこの時間帯では偶然誰かが近くを通りかかるのも期待できない。

助けを求めて叫ぶことさえできないこの状況は、絶望的だった。

「視線で虜になってくれないなら、まず肉体的に弱ってもらうしかないね」

手間そつに言つと、ここめはもう片方の手を凜の胸元に当てた。

「ああ——！」瞬間、衝撃が駆け抜け、凜は凍てつくような痛みで顔を歪めた。

そして、閉じた目を開き驚愕した。

自分の上半身。身に付けていた制服の上着——コートも学ランも——が凍っていた。まるで氷で作った衣服のようにさえ見えた。こごめの手が触れている部分に関しては、波立つ海の起伏をそのまま凍らせたような、氷の波が形作られていた。

「もう一回、してあげるね」

再びの衝撃。

先程とは比較にならないほどの痛みが全身を襲い、肺から空気という空気が漏れ出ていく。

その威力によって、氷化した制服は粉々に砕け散り、中に着ていたワイシャツがぼろぼろになりながら肩に引っ掛かっている程度になった。みぞおちのあたりを中心に、肌は軽い凍傷で赤くなっていた。

「準備かんりようっ！ 今度こそ、美味しくいただきますよ。大丈夫……気持ちいいから」

凜の意識が遠退いていく……。視界はほぼ暗転し、ぼうつとした気だるい感覚が全身を支配する。痛みのせいか、甲高い、不協和音のような耳鳴りがする。

その不快な音に混じって、耳に女声が流れこんできた。

獲物を手に入れたこごめの歓喜の声——ではない。

「そなた、大丈夫か！」

突き抜けるような、強烈な叫び声。

その声で凜は意識を繋ぎとめた。

倒れかけていた身体を、誰かの手が支えてくれているのがわかった。背中に回された冷ややかな手。

目を開ける。その声、手の主は——雪音だった。

「雪音、さん……」

「む？ 凜……？ そなただったのか。……大丈夫か？ うちが学校の門を通った途端に、妙な冷氣——つまりは雪女の気配と、それ

に襲われている人間の姿が目に入ったのでな。駆け付けたのだ。感謝するがよい」

「ありがとうございます……。でも、どうやってここまで……」

「え。いや、その、それは……あれだ！ 散歩をしていたら、ぐーぜんにも学校に辿り着いたのだ。偶然だぞ、意図してやって来たわけではないぞ、決して誰かに道を尋ねたりなんてしておらぬからな！」

その口ぶりに凜は雪音がここにいる理由を察し、場違いにも小さく笑みをこぼした。その様子には雪音は気づいていないようで、さらに続ける。

「今朝そなたの言っていた、学校に棲む化け物とはあやつのことか？」

言って雪音は顔を凜から別のところへと向ける。おそらくその先にはここめがいるのだろう。

朝方、雪音に言った化け物とは違うがこの際そんなことはどうでもよかった。そういえば首を絞めていたはずのここめは……と、凜は雪音の視線の先を追う。

（——いた）

ここめは、凜たちからだいぶ距離をあけたところに立っていた。少し頬が赤くなっていたが、その表情や姿勢からは未だに獲物を狙う意思を感じ取れる。

「そなたが化け物に襲われていたので、とりあえず突き飛ばしておいたぞ」

雪音は余裕そうに、たいしたことなさそうに言う。

まさかあの雪女の力など、雪音からしてみれば取るに足りないものなのだろうか。

次に、雪音はここめに向けて、

「雪が降るなどと、どうも快適な天候だと思っておったが、どうやら原因は貴様のようだな」

重く鋭い声で問うた。

「こごめは答えない。しかし、それが肯定を表わしていた。」

「凜よ。雪女はな、自分の縄張りを主張する意味で天候を雪や吹雪、雹に変えるのだ。しかしそれは自分の治める雪山でやること。それも特別な立場にある雪女のやることだ。人里の気象を変えるなどという無闇に秩序を乱すような真似は、まともな雪女ならせぬ」

雪音はこごめに視線を固定したまま、雪女について詳しくない凜のために説明を入れる。そしてそれを凜が理解したことを確認すると顔を伏せ申し訳なさそうに言った。

「うちもすっかりしていた。久々の人里で季節という概念を忘れておった。雪山は常に冬のようなものだからな。この町で雪がちらついていた、過ぎしやすいという程度にしか思っていなかった。もっと早く、この町にうち以外の雪女がいることに気づいておれば、そなたを危険な目に合わせることもなかったのに……。すまぬ」

「そんな。雪音さんのせいじゃありません。それに、こうして僕を助けてくれましたし」

女性に助けられるのはちょっと情けないかな、などと思いつつ笑顔で返した。

そこへ、こごめの声がかかる。

「いちやいちやしているとこ悪いけど！ あたしの方も見てくれなかな。——でも、ちょうどいいや。『雪姫』の方から現れてくれるなんて」

凜は『雪姫』という初めて聞く言葉に疑問を浮かべる。口ぶりからして雪音に向かって言われたものであるのは間違いないと思うのだが。

そんな凜に構わず、雪音はこごめに答える。

「それを知っておるということは、そうか、貴様うちの雪山の者だな」

雪音の口調が、凄みのある凜々しいものになった。

「うちの管理の甘さが蒔いた種だったか。……どうやら、ここで刈り取らなければならぬようだな」

雪音は一步前に出る。

髪の色が銀に変わった。冷気が彼女の周囲を包み、きらきらとした雪の結晶を伴って渦を巻く。

「闘うなら和服の方がよいのだが、着替えを取りに行く暇もない。それに貴様程度ならこれでも充分だ」

挑発なのか、それとも本心なのか、おそらく両方であろう言葉を浴びせ雪音は一步、また一步とこごめへ近付いて行く。

「ふん……」こごめは、苛立たしげに目を細め、雪音を睨む。

「うちは本気で貴様を消すつもりだ。雪姫であるうちと、一介の雪女でしかない貴様の力の差は歴然だと思うが。逃げるなら、今の内だぞ」

「逃げる必要なんてないわね」

そう言うこごめの顔には、何らかの自信があるように凛には見えた。

「そうか。ならば容赦はせぬ。己の愚かさを悔いるがよい。だが、最後にひとつだけ問おう。……なぜ、凛を狙った」

その、至極単純な質問が——引き金になってしまう。

「なぜって……？ 決まっているじゃない。精気が欲しかったから。これだとちょっと言葉が足りないんだけど結局はそういうことになるわ。あなたも雪女なんだからそんなの常識でしょ？ 雪女は精気を吸うことで、生命維持や力の強化を行う」

こごめの答えに、最も敏感に反応したのは凛だった。

精気が欲しかった——その言葉により導かれる真実。

それに雪音が気づいてしまうことを危惧したのだ。

そして、それは現実となる。

「凛の……精気？」

怪訝そうに呟き、雪音は凛の方へ振り返った。

その顔は初め、こごめが何を言っているのか理解できない、とい

う表情をしていた。それは当り前のことだ。

——雪音は、凜のことを『女』だと思っているのだから。だから、ここめが凜を襲った理由がわからなかったのだ。

雪女が精気を吸うのは人間の男に対してだけである。なのに、なぜ女性であるはずの凜を襲ったのだろうかと雪音はそう考えていたのだ。

「りん……？」

しかし、ここめが当然のように言った「精気が欲しかったから」という言葉。そして振り向いた雪音の瞳が捉えているもの——ワイシャツが破けあらわになった男性でしかあり得ない細くも逞しい凜の体躯。

雪音はそれらから答えを導き出してしまったのだ。

——凜は男である、と。

気付かれて当然の状況だった。むしろ、ここめに襲われていた所を助けられた時にすぐに気づけなかったことの方が奇跡に近い。おそらく、雪女に襲われている人間を助けてみたらそれが凜だったと後から気付いたことや、身体を支えるため密着しており凜の顔ぐらいいしかまともに見えていなかったことにより、凜は女であるという先入観がより強く働いていたのだろう。

「凜……」

雪音の表情が変わった。驚愕と、軽蔑と、騙されたという失望の形に。

「そなたは……」

雪音の顔色が変わった。蒼白に、暗澹に、裏切りに対する赫然の色に。

「男、だったのか……？」

絞り出すように言葉を紡いだした雪音の震える唇は、もうそれ以上何も言うことはなかった。

凜は、何も答えることができなかった。

そして雪音はここめの方へと振り向く。凜へ背を向ける。

雪音の顔が見えなくなるその瞬間。事実を受け入れたくない、できれば何かの間違いや誤解であってほしい、そう懇願するような悲哀の表情が見えた気がした。

しかしそんなものは凜の淡い希望、おろかな妄想だと言わんばかりに雪音は無言を貫いたまま、一歩踏み出した。

9 / 雪姫

雪音は一步踏み出した。

相手との距離はあと七メートルといったところだろうか。

「——そこっ！」

ここめが叫ぶ。同時に、彼女の手の平の上で冷気が凝縮される。水面に油滴を垂らしたように空間が滲み、それは固化して氷の球へと変わる。

即座にそれを投擲した。

何の道具も用いずに投げたとは思えないほどの速さをその氷球は有していた。重火器による砲撃に劣ることのない速度で、雪音へと飛んでいく。

——しかしそれを。

「……愚か者が」

雪音は片手を突き出し、受け止めた。いや、受け止めたという表現は的確ではない。氷球はその勢いにより、手の平に当たった瞬間に砕け散っていた。

「なっ……！」驚き、ここめは口を開いたまま動かない。

雪音とここめとの間にある実力の差。それが非常に大きなものと、雪女であるここめなら既に承知しているはずだが。

「ふん、まさかこれほどとはね」

この期に及んで、ここめの顔からはまだ余裕の色が消えていない。しかしそんなものは、今の雪音にとっては、どうでもいい。

雪音は僅かに身を前傾させて、

「——」

呪文のような言葉を低く呟いた。

にわかに雪音の周囲に雪の渦が巻き起こる。

それを身に纏い、冷気の風で身体を浮かせると、一直線に、跳ぶ

のではなく飛んだ。

「は、早過ぎ……っ！」

ここめが身を守るように両腕をあげる。

彼女の反応は決して鈍くなかった。しかしそれでも、間に合わない。

雪音は既にここめの目の前。

そして、彼女の体躯へ――

「今、うちは機嫌が悪い」

きつすぎるほど強く握りしめた拳を打ち込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9979w/>

スノーチャイルド

2011年10月19日00時41分発行